中に犯して汚穢あり、公然と犯して好色即ち放縱があると云ふべきてあると思ふ。

偶像に事ふること。 神以外の者に敬崇を奉るの罪である、單に木石を神として祭るに止まらない、或ひは神に奉るべき敬崇を人に呈し、或ひは制度に呈し、或は團體に呈し、或ひは主義に呈す、是れ皆な偶像崇拜である、人に自づから神を拜するの心がある、此心を稱して宗教心と云ふ、而して偶像崇拜は宗教心の濫用である、正當の夫妻に呈すべき愛心を他人に呈するのが奸淫罪であるが如くに、獨一無二の神に奉るべき宗教心を神以外の者に呈するのが偶像崇拜である、實に聖書に從へば偶像崇拜は人が神に對して犯す奸淫の罪である（耶利米亞記三章十三節以下、以西結書十六章廿三節以下、何西阿書一章二節以下、馱示錄二章廿二節等を見よ）、偶像崇拜が苟合、汚穢、好色の後に來るは適當の順序である。

巫術。 妖術、魔法、卜筮、呪禁等の迷信である、偶像崇拜に必ず伴ふ罪である、宇宙の主宰に奉るべき敬崇を彼れ以外の者に呈して人の宇宙觀は誤らざるを得ない、茲に於てか多くの迷信が生じ來るのである、迷信は決して無學の結果ではない、不虔の結果である、神を神として認めずして人は何人も或種の迷信に陷らざるを得ない、迷信は無智無學の人に限らない、智者にもある、學者にもある、巫術は迷信である、唯物論の迷信、國家主義の迷信、金力萬能主義の迷信は近世に於て智者學者の間に行はるゝ巫術であつて、等しく偶像崇拜の結果である。

仇恨。 同胞に對し敵意を懷くの罪である、反逆は罪の特性である、男女相反いて奸淫がある、人が神に反いて偶像崇拜がある、而して人が人に反いて仇恨がある、仇恨はすべての爭鬪の原因である。

爭鬪。 仇恨が外に向て現はるゝ時の第一歩である、心に恨らんで外に爭ふ、好意のある所に爭鬪は無い、先づ憎んで然る後に鬪ふ、爭鬪は仇恨の實現に外ならない。

妒忌。 後に在る娼嫉と區別せんがために競爭と譯するが適當であると思ふ、仇恨の更らに具體的になりて外に顯はれたる罪である、未だ娼嫉の深きには至らず

と雖も、而かも既に平和的兩立に堪えずして對手壓倒の途に就く、是れが競爭である、競爭に有利的なると、有害的なるとがある、然し競爭は大抵の場合に於ては娼嫉兇殺として終らざれば止まない、競爭は平和的戰爭である、即ち血を流さざるまての戰爭である。

忿怒。競爭に必ず伴ふ罪である、競爭熱して忿怒となる、恰かも車軸熱して火を發するが如し、之を政治家の選擧場裡に於て見るも、宗教家の傳道界域に於て見るも、競爭のある所には必ず忿怒がある、競爭は罵聲を揚げずしては決して行はれない、憤然叱咤して敵を追ふと云へば立派であるが、肉の行爲たる忿怒と解すれば甚だ醜くある。

分爭。黨派心である、次に來る結黨の前兆である、競爭の他に傳染せし結果である、即ち一人敵に當らんとせずして同類相結んて彼を仆さんとする心である、

バウロがピリピ人に書贈て

或人は黨を結ぶ心よりキリストを宣ぶ

と言ふたのは此心てある（腓立比書一章十六節）、今も昔と異なることなく傳道界に盛に行はるゝ罪てある。

結黨。分爭の事實となりて顯はれたる罪てある、平和は全く破れて、一團は割れて數團となり、各自、其黨する旗幟の下に立つ、曰く我はバウロに屬す、我はアポロに屬す、我はケバに屬す、我はキリストに屬すと（哥林多前書一章十二節）、而して譏詐と呪詛の鎬を削りて相鬪ふ、餘事は措て問はず、平和を主とする基督教會すら今や六百有餘の教派に分かれ、其間に犬猿も啻ならざる惡鬪が行はれつつある、實に歎ずべきの限りてある、之に對するバウロの訓誡は左の如くてある、

汝等思念を同うし、愛心を同うし、心を合せて念ふことを一にし、以て我が喜びを滿たしめよ、何事を爲すにも黨を結び或ひは虛榮を求むる心を懷くべからず、各々謙りたる心を以て互に人を己に愈れりと爲よ

と（腓立比書二章二、三節）、結黨の罪惡に對し、之よりも適切なる訓誡は無い。

異端。 結黨は黨派の樹立である、異端は異說の唱道である、眞理のために異說を唱ふるは可い、實に多くの場合に於て異端と稱せらるゝ者が眞理であつて、眞理と稱する者が異端である、異端の異端たるは其說の如何に由らない、之を唱道する動機精神に由る、教理を弄び「黨を結び或ひは虛榮を求むる心」より之を唱ふる、是れが異端である、腐敗せる教會に對してキリストの純福音を唱ふるは決して異端でない、異端は教理ではない、又學說ではない、異端は惡しき、曲りたる、邪まなる心である、故に說の異端なると否とは其說の如何に由ては解らない、其之を提出せし動機を知て解るのである、例へば今日唱へらるゝ聖書の高等批評の如き、說其物は決して異端ではない、其れが異端の道具として使はれる事はあらふ、然し乍ら高等批評其物は決して異端でない、異端は保守思想を以ても行はれる、然り、分爭、結黨の如何に多く保守家の間に行はるゝかを見て、パウロの玆に謂ふ所の異端の決して新說唱道を指したる者でない事は明かである、異端の文字程宗教家の間に誤解さるゝものはない、異端は罪である、罪であるが故に心の事で

ある、說の事でない。

娼嫉。 前に見えたり、反對者の成功、繁榮、存在に堪えざる罪である、仇恨が其極に達したる罪である、單純なる仇恨は亢進して終に深刻なる娼嫉となる、彼れ怨めしとの心は終に彼れ無かれよかしとの念となる、罪は罪に由て昇る、仇恨は爭鬪以下の段階を經て終に娼嫉の怪物となりて顯はれるのである。

兇殺。 前に見えたり、仇恨最後の手段である、之に由て萬事は終るのである、爭鬪を試み、競爭、分爭、結黨、異端と、手を替へ品を代へて其反對者を仆さんとして能はず、終に兇殺に由て其目的を達するのである、仇恨は始めであつて兇殺は終りである、カイン、アベルを殺して萬事は休んだのである、或ひは毒刃を以て、或ひは毒舌を以て、或ひは毒筆を以て、或ひは奸策を以て、兇殺に由て仇恨を晴らして惡人の心は滿足するのである、仇恨が兇殺に終て罪の一段落は就くのである、

兇殺は罪惡の極である、之を以て此目錄は終るべきである、然るにパウロは玆に至

て尙ほ書落のあることを發見した、彼は飲酒の罪を書落した、故に彼は附錄として、此比較的に輕い罪を娼妓兒殺の重罪の後に加へたのである。

醉酒。 飲酒の罪の總稱である、其中に沈湎、醉興、饗餐、酒宴等の別がある（彼得前書四章三節を見よ）、世に一般に行はるゝ罪であつて、多くの場合に於ては罪として認められざる罪である、然れども醉酒は大なる罪たるを免れない、良心を麻痺せしめ、家庭を破壞し、貧困を來たし、疾病を釀すものにして醉酒の罪の如きは無い、醉酒は諸惡の媒介者である、其直接の結果より見れば比較的に輕い罪であるが、然かし其永遠に及ぼす結果より見て其まことに地獄の火、囚毒、死毒たるを疑ふことは出來ない。

放蕩。 彼得前書四章三節に於けるが如く醉興と譯すが當然であると思ふ、無恥の醉酒と稱せんか、羅馬書十三章十三節には饗餐と譯してある、恥を忘れ、己を忘れて醉酒に耽ける罪である、酒に自己を放棄する罪である、自から招く一時的の發狂である、其時に良心はない、道理はない、禮節はない、肉慾は其儘暴露さ

れて、人は純乎たる禽獸と成る、人の如何に賤しき乎は彼が此罪に陷る時に現はれる、而かも彼れ醒めて後は再び天下の事を語る政治家たり、又國家の干城たる軍人たるのである、人が酒の奴隷となること、是れが醉興の罪である。

及び之に類する事。 醉酒、醉興に類すること、即ち沈湎、饗餐、酒宴の類を云ふ、パウロは悉く之を茲に揭ぐるを好まなかつた、彼は既に罪の名稱十六を揭げて倦厭の感を起したであらふ、罪の數に限りはない、「之に類する事」と云ひて其すべては盡きるのである。

目錄第三に揭げられたる罪の名稱はすべて十六である、之を左の如くに類別することが出來る、

異性に對する罪、情の濫用＝苟合、汚穢、好色（放縱）。

神に對する罪、宗教心の濫用＝偶像崇拜、巫術（迷信）。

人に對する罪、敵意の抱懷＝仇恨、爭鬪、妬忌、忿怒、分爭（黨派心）、結黨、異

端、媚嫉、兇殺。

自己に對する罪、節度の超越＝醉酒、放蕩、（醉興）。

順序正しき罪の目錄である、肉は情の所在であるが故に、罪を肉の行爲と見たる此目錄は凡ての方面に於ける情の亂行を能く盡くして居る、罪は勿論情に限らない、意の罪もある、識の罪もある、然し乍ら罪として最も顯著なるは情の罪である、故に曰ふ「肉の行爲は顯著なり」と、表面に現はれて何人も之を罪として認むることの出來るもの、是れが肉の行爲即ち情の罪である。

以上は罪の目錄である、然し之に添ふて德の目錄がある、即ち左の如し、

靈の結ぶ所の果は、仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信、溫柔、撙節、云々（加拉太書五章廿二、三節）。

罪は肉の行爲であつて內より外に向て現はるゝ者である、之に對して德は靈（聖靈）の結ぶ果であつて、外より內に臨む者である、行爲は複雜である、故に複數である、

果は單純である、故に單數である、英語を以て言へばenmities に對してlove がある、jealousies に對して goodness がある、罪の名稱はすべて複數名詞であつて、德の名稱はすべて單數名詞である、罪の分離に對し德の統一を示し、能く二者の性質を明にして居る、名は結黨であると雖も結黨は結合ではない、結黨は不平分子の集合である、結黨は反逆である、故に對手の引退と同時に自から分散する者である、故にdivisions と云ひてdivision と云はない、結黨の結黨である、爭鬪の爭鬪である、媚嫉の媚嫉である、相結び、相爭ひ、相嫉むことである、眞正の味方があるのではない、唯同一の敵があるのである、其敵にして斃れん乎、後は相互の爭鬪、相互の兇殺となるのである、紛雜なるものにして肉の行爲たる罪の如きは無い。

罪の複雜なるに對して德は單純である、すべては愛の一字を以て盡きて居る、聖靈の結ぶ所の果は一つである、卽ち愛（仁愛）である、而して愛の諸方面に現はれたる者が喜樂以下の美德である、而かも諸德ではない、一ッの德である、德の德たるは其合一性に於てある、平和は一ッである、溫柔も一ッである、而して平和と溫柔と

は又一ッである、而してすべてが相合したものが一ッの愛である、三位一體の神より出て之に等しき者であつて、多くであつて、一ッであり、一ッであつて多くである者である。

罪は肉の行爲であると云ひ、德は聖靈の結ぶ所の果であると云ふ、故に罪は我に在る者であつて、德は生來の我には無い者である、**善なる者は我れ即ち我肉に居らざるを知る**とパウロは言ふて居る(羅馬書七章十八節)、又**凡の善き賜物と全き賜物は皆な上より降るなり**とヤコブは言ふて居る(雅各書一章十七節)、罪は我物であつて德は賜物である、故に我は誇ることは出來ない、我は唯祈て善なるを得るのである、罪に勝つの途は茲に在る、德を建つるの途も亦茲に在る、克己自制、以て完全の聖人と成らんと欲するも成れない、謙虛、己を卑うして聖靈(キリスト)の降臨を仰いで神の聖旨に合ふ者となることが出來るのである、故にパウロは曰ふた、

我れ言ふ汝等靈(聖靈)に由て歩むべし、然らば肉の慾を爲すこと莫らん

と(加拉太書五章十六節)、基督者建德の秘訣は簡單なる此一節に籠つて居る。

天災と刑罰

附、罪と死

天災は讀んで字の通り天災であらふ、即ち天然的現象であらふ、地震は地層の波動であらふ、噴火は地熱の放發であらふ、之に何にも怪むべき所はあるまい、天災に意志もなく道理もあるまい、循て之は神の刑罰ではあるまい。

然かしながら神は無意識の天災を刑罰の道具として使ひ給ふ、天災が惡人の上に墜落れば是れ即ち神の刑罰である、惡人は既に神に詛はれたる者であるから、天災は其詛を實にする、然り、天災其物は刑罰ではあるまい、然かし、惡人が之に遭遇すれば天災は確かに天罰である。

然らば義人が之に遭遇すれば如何にと問ふ人もあらう、然り、義人が之に遭遇すれば天災は天罰ではなくして善き試練である、彼れ若し之がために命を隕さば彼は神に召されたのである、彼れ若し之がために產を失はゞ、是れ彼が靈に於て富まんが

ためである、義人は既に神に恵まれたる者であるから、天災は反て其恵を實にするに過ぎない。

天災は惡人に取ては刑罰である、義人に取ては恩惠である、我等は常に衷に備へて天災に備ふることが出來る、是れが宗教の力である、科學以上の力である。

* * * * * * * * * * * *

天災が爾うである、病も死も亦爾うである、病其物は刑罰でもなければ亦恩惠でもない、惡人が之に罹れば刑罰である、義人が之に罹れば恩惠である、之に罹りし者必しも神に詛はれたる者ではない、之に罹りて神を詛ふ者、是れが神に詛はれし者である。

* * * * * * * * * * * *

聖書に**罪より死來り**(羅馬書六章十二節)と書いてある、之は罪なくして肉體の死は無かつたとのことであらふ乎、即ち、人が罪を犯すまでは生物界に死なるものはなく、萬物悉く永久にまて存在したといふことであらう乎、然し死は天然的現象の一

てはあるまい乎、其肉體に於ては**一たび死ぬることは人に定まれる事**(希伯來書九章廿七節)ではあるまい乎、或ひは爾うではない乎も知れない、或ひはすべての生物の死も人類の罪の結果を預表したものである乎も知れない、死といふ死はすべて罪の結果であつて、罪なくしては死は何れの形を以てしても此世に臨まなかつた乎も知れない、爾うして或る神學者は此說を取て動かない。

然かし是れ維持するに至て困難なる說である、死は確かに人類が此世に現はれし以前より在つた、死はまた生物生存上の必要として認められる、此限ある地上に若し死がなかつたならば暫時にして生物は悉く死せざるを得ざるに至る、死は生の必要條件である、死がなければ生はない、若が老に代はるにあらざれば進歩と改善とは倏忽にして中止する。

然らば**罪より死來り**とは何ういふ事であらふ乎、是は人が肉體の死を靈魂の死として感ずる事ではあるまい乎、即ち死の蔭に遭ふて自己の死滅を自覺せしめられることとてはあるまい乎、內に光明の充つる時は暗黑の襲ひ來るを懼れざるやうに、靈魂

に生命の充つる時は肉體に死の臨むも懼るべきではない、然るに裏に生命の盡きし結果として外の死を裏の死と同視するに至る、是れが即ちパウロの所謂る**罪の價は死なり**と云ふ事ではあるまい乎(羅馬書六章廿三節)、少しく逆說のやうには聞ゆるなれども死を死と感ずること、是れが死ではあるまい乎、人はもと神と同じく靈なれば肉の死を死と感ずべき者ではなかッた、然るに自己の傲慢の故に神より離れし結果として、既に裏に於て死にたれば外の死を裏の死と同視するに至ッた、是れ即ち實の死であつて、最も苦しき最も懼るべき死である。

* * * * * *

天災其物は刑罰ではない、惡人が之に遭遇して刑罰として感ぜらるゝのである、死其物も刑罰ではない、裏に死したる者が之に襲はれて之を死滅として感ずるのである、刑罰はすべて主觀的である、然かし主觀的であればとて實在せざるものではない、實在の基礎は性格(パルソナリチー)である、爾うして性格の如何に由て性格無き天然物の道德的價値が定められるのである、**潔き人にはすべての物潔く、汚れたる人には一として潔き物なし**(提多書一章十五節)、實に其通りである、神を愛する人には天災も死も刑罰ではない、恩惠である、之に反して神を畏れず、肉の慾に事ふるほか他に生涯の目的なき人に取りては事として咒詛(のろひ)ならざるはない、彼等に取りては天災は懼るべき最終の裁判の前兆である、**死は第二の死**(默示錄二十章六節)の先驅(さきだち)である。

キリストの死

キリストの死を見るに二方面がある、其の第一は其解釋である、其第二は其事實である。

先づ其解釋に就て語らんに、之を最も明白に唱へたる者は使徒パウロである、

我等思ふに一人すべての人に代りて死にたればすべての人既に死にたるなり（哥林多後書五章十四節）。

キリストは我等猶ほ罪人たる時我等のために死に給へり（羅馬書五章八節）。

キリスト既に我等のために詛はるゝ者となりて我等を贖ひ、律法の呪詛より脱れしめ給へり、そは凡て木に懸る者は詛はるゝ者なりと錄されたれば也（加拉太書三章十三節）。

以上に由て觀ればバウロがキリストの死を贖罪の死と見たことは明かである、之れに由て人類の罪は赦され、之に由て其上に懸りし呪詛は除かれたりとの事である、キリストの死に關して一般に基督教會に由て懷かるゝ觀念は此觀念である、深き眞理を其の中に藏する觀念であつて福音の根本義として一般に仰がるゝは決して無理でない、罪人の寄縋るべき最後の據所はキリストの十字架である、是れありて彼は始めて神の前に立て人のすべて思ふ所に過る平安を感ずるのである、バウロの是等の言は彼の神學說とのみ見てはならない、是れ彼の深き心靈的實驗より出たる言辭である、

噫、我れ困苦める人なる哉、此の死の體より我を救はん者は誰ぞや

と己れに問ふて、

是れ我等の主イエスキリストなるが故に神に感謝す、

と己れに答へし彼のみ能く是等の言を發し得たのである（羅馬書七章廿四、廿五節）、故にバウロのキリストの死の解釋とは云ふものゝ普通の意味に於ての解釋ではない、即ち哲學的解釋ではなくして、實驗的解釋である、是は據て以て神學說を組立つべき言辭ではない、神の前に義とせられんとする罪人の實驗を言表はしたる言辭であつて、バウロ其人、並に彼と等しき實驗を有つたる人々の心の狀態を言ひ表はしたる言辭である。

バウロに由て發せられしと同樣の言辭は聖書の他の記者に由ても發せられた、故にバウロの十字架觀なるものをバウロ獨特の解釋と見てはならない、キリストに由て發せられし言辭の中にも、亦ヨハネ、ペテロ、希伯來書の記者等に由て用ゐられし

言辭の中にも十字架の贖罪的意義を示したる者は決して尠くない、贖罪其物の眞理なると否とは余輩の今茲に論ぜんと欲する所ではない、乍然、贖罪はパウロ特有の教義であつて聖書記者全體の與つて知らざる所であるとの提說は余輩の全然反對する所である、キリスト御自身の言としても左の如き者が錄されてある、

此の如く人の子の來るも人を役ふために非ず、反て人に役はれ又多くの人に代りて生命を予へ、その贖ひとならんためなり（馬太傳廿章廿八節、馬可傳十章四十五節）。

又パプテスマのヨハネはキリストに就て證明して

世の罪を負ふ神の羔を觀よ

と言ふたと錄してある（約翰傳一章廿九節）、其他、ヨハネの書翰並に默示錄に於て、希伯來書に於て、ペテロの書翰に於て、キリストの死に關する贖罪的觀念を暗示又は表示する章節は今茲に之を一々引證することは出來ない。

新約聖書がキリストの死の贖罪的解釋を明示して居ることは確かである、乍然、それと同時に亦其事實を詳記して居ることも確かである、而して基督教會全體が其注意をキリストの死の解釋に奪はれて、其歷史的事實に注意しないことも亦確かである、キリストの死と言へば彼等は贖罪の死と解して其他を問はない、神の怒を宥むるための死、人類の罪を除きし死、祭壇の上に於ける疵なき汚なき羔の死、我等の義を全ふせし死、義を罪人に歸せんがために神の子が彼等に代て受けし刑罰、故に苦痛の極、耻辱の極、悲慘の極と、是れ基督教會全體に由て懷かるゝキリストの死に關する觀念である、彼等はキリストの死を人の死として見んと欲しない、神の提供されし犧牲の死とのみ見んと欲する、彼等は十字架に於て己が罪の消滅をのみ見んと欲する、之に最も勇敢なる、最も柔和なる模範的の死を見んと欲しない、茲に於てか余輩が特更らにキリストの死の事實に就て研究するの必要が起るのである。

幸にして聖書はキリストの死に就て詳しく述べて居る、馬太傳の第二十七章、馬可傳の第十五章、路加傳の第二十三章、約翰傳の第十八章、是れ皆なキリストの死に

關する事實其儘の記錄である、其中に議論は無い、神學的說明はない、事實其儘である、而して余輩は之を讀んで必しもパウロの贖罪說を思出さない、之を讀んで唯深く感ずるまでゞあつて、其宗敎的意義を發見せんとする好奇心は起らない、四福音書の傳ふるキリストの死の事實は人なるキリストの死の事實である、其處に愛は溢れ、人情は漲る、其處に人たる者の死が詳かに叙述されて居る、故に是れ神學者の眼を以て讀むべき者ではない、歷史家の心を以て閲すべき者である、四福音書はキリストは何故に死に給ひし乎、其解釋を供せんとしない、キリストは如何に死に給ひし乎、其事實を述べて居る。

(一)キリストの死に就て余輩の第一に注目すべきことは彼に臨みし死の天然的に臨みし者でない事である、キリストは天壽を全うして死に就いたのではない、歲は三十を超ゆる二つ或ひは三つ、人生の花の眞ッ盛り、滿々たる希望は目前に横はり、隆々たる能力は身に溢れたり、人生若し樂むべくんば此時である、然るに死は强暴的に彼を襲ふた、彼は自身聖くして柔和なりしも、社會と敎會とは甚しく彼を憎んだ、通常は相排し相擠して歇まざりしパリサイの人、サドカイの人、又はヘロデの黨も此時此人に對しては相共に一致した、彼は國民の憎惡の焦點となつた、而して其「十字架に釘けよ、十字架に釘けよ」との喊聲の下に彼の敵人の手に渡されて髑髏山上の晒者と成て消えた、歎ずべく、慨すべく、悲むべきものにしてキリストの死の如きはない、玆に正義は不義の殺す所となつたのである、彼の潔白も柔和も仁慈も彼の身を全うするに足りなかつた、否な彼の完全は反て彼を殺すの原因となつた、キリストの死に由て余輩は此世の決して正義に與する者でないことを知るのである、此世は抽象的の正義を愛する、然れども實際的の正義を憎む、正義が自己に關せざる限りは之を賞讃して歇まない、然れど其、自己の身に臨み、其實行を要求せらるるや、憤然起て之を拒み、之を排し、之を攻め、終に之を殺さゞれば歇まない、キリストに臨みし死の劇烈なりしは彼がすべての人に勝りて聖く且つ義しかつたからである、キリストの死は義人の死である、其點に於て他の義人の死と異らない、乍然、富士山が其周圍の山々に秀づるが如く、彼の正義は他の義人のそれに秀でしが

故に、彼に臨みし死も亦それ丈け劇烈であつたのである、キリストの死は特別であつたと言ふことは出來ない、同じ理由の下にソクラテスも死んだ、佐倉惣五郎も殺された、余輩はキリストの死を判別して特別にユダヤ人と其有司、祭司、學者等の罪を責むべきでない、キリストが若し今日世に出て給ふならば今の政府と教會とは相合して同じやうに彼を殺すに定つて居る、

世の人は我を惡む、そは彼等が行ふ所は惡しゝと我れ證すれば也（約翰傳七章七節）

と彼は言ひ給ふた、キリストの死は義人に臨む當然の死である、彼れ一人死して我等はすべて死より免がるゝのではない、彼も斯く死にたれば我等も亦彼の如くに死ぬべきである、彼の死は代償的ではない、模範的である、我等も若し彼の如くに神と其正義とに忠ならば、彼の如くに此世の人の憎む所となりて、終に其殺す所となる、所謂文明の進歩なるものは此點に於て未だ此世に改善を加へない、此世は今も猶ほ昔の如く光の敵である、

光は暗に照り、暗は之を曉らざりき（約翰傳一章五節）、

然り、今も猶ほ之を曉らずして、光の地上に臨むあればすべての方法を盡して之を打消し、多くの惡名を之に附して之を髑髏山上の晒者となさなければ止まない。

（二）斯くも劇烈に彼を襲ひし死に對してキリストは如何に靜肅なりしよ、是れ彼の死に關して余輩の注目すべき第二の點である、此時に際して彼に死の恐怖なる者は寸毫もなかつた、彼は言を曖昧にして免れ得べきの死を免れんとは爲なかつた、「汝は頌むべき者の子キリストなる乎」との祭司の長の問に對して彼は沈默を破つて明白に答へて曰ひ給ふた

然り、人の子大權の右に坐し、天の雲の中に現はれ來るを見るべし

と（馬可傳十四章六十二節）、ピラト彼を放免せんと欲し、彼より辯解を求めしと雖も口を噤いで語らず、然れども「爾はユダヤ人の王なるか」との問に對しては人の誤解を恐れず、身の危險を顧みず、儼然として答へて曰ひ給ふた

爾が言へる如し

と（路加傳廿三章三節）、ピラト、又彼に向つて

我れ汝を十字架に釘くる權威あり、亦汝を釋す權威あり、汝、此事を知らざる乎

と曰へば（約翰傳十九章十節）、彼は權威を憚らずして答へて曰ひ給ふた、

汝、上より權威を賜はらずば我に對つて權威ある事なし

と、若し死に臨んで眞に大膽不敵なる者があつたとすれば、其人はキリストである、彼は今茲に軍隊に加つて、喇叭の聲に勵され、敵愾の心に驅られて、敵と相對して立つたのではない、又は名を靑史に垂れんと欲する心より、或ひは後世に嗤れんことを恐るゝ動機よりして茲に世の所謂る節操を全うせんとしたのではない、彼は茲に獨り立つたのである、彼の弟子は悉く彼を棄て去り、彼の國人は擧て彼に對して起ち、彼は王に逆ふ者、民を毒する者、神を瀆す者として政府と敎會とに鞫かれつゝあつたのである、戰場に出ては虎の如くに勇猛なる兵卒も法廷に引出されては猫の如くに怯懦である、凌辱を恐れて自刄を敢てする武士も手を束ねられて衆人稠座の中に置かれては能く其頭を擡げ得ない、詩人シルレルは曰ふた、

勇者は獨り立つ時に强し

と、實に獨り立て强き者でなければ眞正の勇者ではない、友なく、味方なく、誹謗、讒誣、嘲弄、侮蔑の中に在て、肅然、自己を持する者、是れが眞正の勇者である、羅馬と希臘と日本と支那との歷史は多くの勇者の實例を載せて居る、三百の小軍を以て百萬の波斯軍を迎へしレオニダスは確かに勇者であつた、死を覺悟して獨り身を敵人の中に投ぜしレギラスは確かに勇者であつた、項羽も勇者であつた、淸正も勇者であつた、乍併、イエスキリストに較べて見て彼等は皆な甚だ劣等なる勇者であつたと言はなければならない、キリストは敵の前に立て敵を敵と見ない勇者であつた、彼は敵愾心と稱する者の如きは寸毫も之を心に蓄へざりし勇者であつた、主義のための勇者であつた、信仰のための勇者であつた、神と人類のための勇者であつた、實にキリストは茲に勇氣の模範を供し給ふたのである、彼に由て勇氣に關する人類の思想は一變したのである、

然り、然り、否な、否な、

之より過ぐるは惡より出るのである、汝は神の子キリストなる乎と問はるれば「然り」と答へ、汝は洵にユダヤ人の王なる乎と問はるれば「然り」と答ふ、生命を賭して衆人の前に嘲弄、忿恚を顧ずして「然り」と答へ得る者が眞正の勇者である、世に勇敢の死は多くありしと雖もキリストの死に優りて眞に勇敢なりし死は無い。

(三)キリストの死は愛の死であつた、此時愛と憎とは非常の勢力を以て衝突した、憎は潮の如く愛に押寄せて之を沒了せんとした、然し愛は岩の如くに之に抗して其呑去る所とならなかつた、憎は怒れる濤の如くに咆哮りて愛の岸を打つた、然るに愛は其優しき手を伸ばして憎の怒濤を制止めて曰ふた、

此までは來るべし、此を越ゆべからず、汝の高浪此に止まるべし

と(約百記三十八章十一節)、弄られ、嘲けられ、擊たれ、唾きせられて、彼は一言の荒らき言葉を出さなかつた、而してすべての侮蔑、すべての嘲弄、すべての屈辱に對して彼の發せし最後の一言は

父よ彼等を赦し給へ、其爲す所を知らざるが故なり

との事であつた(路加傳廿三章卅四節)、實に後に使徒ペテロが曰ひしが如く

彼れ罪を犯さず、又其口に詭譎なかりき、彼れ詬られて詬らず、苦しめられて激しき言を出さず、唯義を以て鞫く者に之を託したり(彼得前書二章廿二、廿三節)。

茲に如何なる手段を以てしても怒らすことの出來ない唯一人の人があつた、棘の冠を冠らせても、掌を以て打ても、唾きしても、十字架に釘けても、怒らすことの出來ない一人の人があつた、憤怒の颶風は吹かば吹け、此愛の巖を動かすことは出來なかつた、憎惡の潮は來らば來れ、此愛の堤を崩すことは出來なかつた、キリストの死は憎惡に對する愛の勝利の死であつた、茲に憎惡は非常の勢力を以て愛と衝突して其擊退する所となつた、今より後、憎惡は其猛威を誇ることは出來ない、既に一回人の子の打破る所となりて其殲滅は既に宣告された、キリストの愛の死に由て世界平和の端緒は開かれた、今より後勝つ者は負ける者である、擊たるゝ者は擊つ者を征し、刺さるゝ者は刺す者を服す、キリストは十字架に上りて愛は最高の位に即いた。

(四)敵に對する愛の勝利の死でありしキリストの死は又人に對する恩惠表顯の死であつた、死に臨んで彼の心を痛ましめし者は自己の不幸と苦痛とではなかつた、此時に臨んで彼は一回も苦痛の聲を揚げなかつた、然れども十字架を負はせられて髑髏山に到るの途中、エルサレムの婦人等が己れの跡に從ふを見て、大なる禍患の遠からずして彼等の上に落來るを思ひやり、彼等を半ば警め半ば慰めて曰ひ給ふた

エルサレムの子女よ、我がために哭く勿れ、惟己れと己が子のために哭けよ、未だ産まざる者、未だ孕まざるの胎、未だ哺せざる者の乳は福ひなりと曰はん日來らん

と(路加傳廿三章廿八、廿九節)、是れは威嚇の言辭でもなければ、亦怨恨の言辭でもない、同情の言辭である、此時に於けるキリストの憂慮は自己の事に就てゞはなかつた、ユダヤとエルサレムの事に就てゞあつた、彼が曾て橄欖山の巔よりエルサレムの都城を臨み、涙を含みて

噫エルサレムよ、エルサレムよ、預言者を殺し、汝に遣されし者を石にて擊てる者よ、牝鷄が其雛を翼の下に集むる如く我れ汝の赤子を集めんと爲しこと幾回ぞや、然れども汝等は欲せざりき

と叫びし時と同じ同情の心を今、此時エルサレムの婦人等に語り給ふたのである(路加傳十三章卅四節)、キリストが今悲むことは自己の殺さるゝ事ではない、彼の國の亡ぼさるゝことゝ、其れと同時に多くの無辜の者が苦むことであつた、彼は此時に臨むも猶ほ己を忘れて國と民とを思ふた、死の苦痛は大なりしも、國を憂ふるの憂愁は更らに强かつた、愛は彼をして死の苦痛を忘れしめた、彼に取りてはユダ國の前途は彼が脊に負ひし十字架よりも遙かに重くあつた。

彼は既に十字架に懸けられて二人の罪人の間に曝された、其一人は彼を譏りしに反へて、他の一人は彼に乞ふて曰ふた、

主よ、汝の國に來り給ふ時に我を憶へ給へ

と、今や血は手と足とより滴れ、苦痛其極に達せし時に、一人の罪人の罪の悔改の表白に接してキリストは天來の美曲を耳にするが如くに感じた、彼は玆に一友人の

彼の側に立つを知つた、今や有司の嘲笑何にかある、祭司學者等の藐視何にかある、まことに

一人の罪ある人悔改めなば、悔改むるに及ばずと稱する九十九人の義人よりも尙ほ天に於て喜びあらん

である(路加傳十五章七節)、一人の罪人の悔改の聲を聞いて、キリストの心は春草が東風に觸れし時の如くに蘇生した、彼は玆に最期の場合に於て一人の味方を發見した、それは學者の一人ではなかつた、有司、祭司等の一人ではなかつた、悔改を要せざる義人の一人ではなかつた、盜賊であつた、多分不平家の、一人であつて、國事犯の故を以て罰せられし者の一人であつたらふとの事である、彼の悔改の言葉は實にキリストに取りては蜂蜜の如くに甘くあつた、彼は罪人の乞ひに應へて曰ふた

誠に我れ汝に告げん、今日汝は我と偕に樂園に在るべし

と(路加傳廿三章四十三節)、キリストにも臨終の慰藉があつた、それは彼と共に十字架に釘けられし罪人の一人の悔改であつた。

彼れ今氣息絶えんとするに方て彼が釘けられし十字架の旁に彼の母と彼女の姉妹と其他二三の婦人の立つを見た、又彼等と共に彼の愛する弟子の一人の在るを見た、玆に於てか彼は又自己を忘れて母の事に思ひ及んだ、弟子を見て母に曰ふた

是れ汝の子なり

と、母を見て弟子に曰ふた

是れ汝の母なり

と(約翰傳十九章二十五節以下)、キリストが此世に於て爲せし最後の事は其母を弟子に託することであつた、此事を爲し終りし後に彼は

我れ渴く

と曰ひて醋の數滴を口に受けて

事竟りぬ

との一言を以て首を低れて靈を附せりとのことである、キリストの敎に孝道なしと言ふ者は誰である乎、孝は之れよりも切なるを得る乎、若しキリストの他の行爲に

して東洋人の倫理思想に適はざる所がありしとするも、此最後の一事が彼に關する不孝の誤想を一掃するに足るではない乎、キリストは母を想ふ最後の一念を以て此世を去られたのである。

暴死に際して國を思ひ、罪人を思ひ、母を思ふた、優さしき美はしき死とは是れである、敵に對する怨恨の彼の心を亂すなく、薄命を歎つ不平の彼の胸を充たすなし、唯同情溢れ、愛心湧く、實に人は未だ曾て斯の如くに死なかつた、ソクラテスの死も釋迦の死も斯くまでには立派でなかつた。

或人は曰ふ、キリストの最後の一言たる

エリ、エリ、ラマサバクタニ（我神、我神、何ぞ我を棄て給ふ乎）

は確かに神を怨みたる言辭であると（馬太傳廿七章四十六節）、成程、言辭其れなりを讀むならば、爾う解せらるゝ乎も知れない、然しながら福音記者が此言葉を載せたのは神に對するキリストの最後の態度を示さんがためではない、是れは單に彼がエリヤを呼ぶと彼の敵に誤解せられしとの事を示さんために書記れたのである、言辭其物は詩篇第二十二篇の發端の句であつて、其中に神を怨むの意味は少しも存して居らない、否な、事實は其正反對である、全篇を讀んで其終に至れば、其、他の聖詩と等しく信仰讃美の詩であること が解かる、是れはキリストが善く暗誦んじて居つた詩であつて、此場合に臨んで自づと彼の唇に上つた者である、之を信仰の減退、怨恨の發表と見るは大なる間違である、神を呼ぶに我が神（*My God*）と言ふたのである、神と彼との間に親密の關係の絶えなかつたことは善く判明る、神は終りまで其愛子を棄てなかつた、キリストも亦終りに臨んで子が父を呼ぶが如くに

エリ、エリ（我が神、我が神）と叫んで其援助を求めた。

畢竟するにキリストの死は死ではなかつた、是れは生を以て死に打勝つことであつた、死は最も醜惡なる形を以て彼に臨みしに彼は最も善美なる道を以て之を迎へた、キリストに由て死は聖化されて、優れて美はしき者となつた、キリストは實に死を廢し給ふた（提摩太後書一章十節）、キリストは其死狀に由て死なる者をして無からしめ給ふた、死は苦痛であり、煩悶であり、悔恨であり、絶望であるのに、茲に苦

痛を忘れ、煩悶を離れ、悔恨を覺えず、絶望を知らない死の模範が供せられた、即ち愛の絶大の力が示された、愛は人の最大の敵なる死にさへ勝ち得るの力である、死をして死ならざらしむる者は愛である、福音記者はキリストは最期に臨んで來世の希望を以て自己を慰めたとは一言も曰ふて居らない、彼は唯愛した、而して愛して以て死に打勝つた、實に愛を除いて他に死に打勝つの力はない、臨終の聖餐式も、正統教會の奉ずる來世存在に關する教義も、以て死をして死たらしめざるに足りない。

而して斯かる立派なる死が之を目擊し、又は之を執行せし人等に及ぼしたる感化は如何でありし乎と云ふに、彼等は之に由て彼の神の子なると、自己等の極惡の罪人なるとを認めざるを得ざるに至つた、百夫の長は事の成行を見て曰ふた

此は誠に神の子なり、誠に此人は義人なり、

と(馬太傳廿七章五十四節、路加傳廿三章四十七節)、彼の說教を聞て彼の義人なるを知る能はず、彼の奇跡を見て彼の神の子たるを認むる能はざりし彼等は、玆に彼の死狀を見て彼の何者たる乎を覺らざるを得ざるに至つた、キリストの死は實に彼が爲したる最大の說教であつた、誠にイエスのキリストたるは彼の死に由て現れた、十字架を說かずしてキリストを傳ふる能はずと云ふは此事である、人の何たる乎は其死狀に由て判明る、キリストの神の子たるは彼の神らしき死に由て判明る、之を見て人は彼の神性を否む事は出來ない、而して又之を見て彼等は强く自己の良心を擊たれ、罪の赦免を切求せざるを得ない、彼に對して罵言、嘲笑を擅にせし有司、祭司、學者等も彼の死狀を見ては最早や口を開き得なかつた、彼等は彼を死刑に處して自身死刑に處せられしが如くに感じた、凱歌を揚げながら彼を髑髏山に送りし彼等は重き良心に自己を責められ、頭を低れ、肅然として、離ればなれになりてエルサレムを指して歩を運んだであらふ。

而してキリストの死が彼等に此感覺を與へし事は、之より殆んど二ヶ月を經て後、ペンテコステの日に至りて、ペテロが立てユダヤ人を責め

汝等は無法の手を以て彼を捕へ、十字架に釘けて殺せり

と曰ひしや、此言を聞きし彼等は其心刺さるゝが如くに感じ、ペテロと他の使徒等に問ふて曰ふた

人々兄弟よ、我等は如何にすべき乎

と(使徒行傳二章廿三、卅七節)、而してペテロの此說教の結果として其日弟子に加はれる者凡そ三千人ありたりと云ふ、前には「十字架に釘けよ」と叫びしエルサレムの市民もキリストが毛を剪る者の前に默す羊の如くに十字架の上に死せしを見、又は聞きては、彼を主として仰がざるを得ざるに至つた、玆に於てか彼が曾てユダヤ人に告げて曰ひし

我れ……我れ若し地より擧げられなば萬民を引きて我に就らすべし

との言が事實となりて顯はれたのである(約翰傳十二章卅二節)、然り、キリストは今も猶ほ其死を以て萬民を己れに引き附けつゝある。

實に我等はキリストの死に由て救はるゝと言ふは此事である、(一)キリストの死に由て神の愛は現はれた、我等は之に由て彼の愛に勝つに足るの罪なき事を示された、我等の罪は如何に重くあるも、縱し我等は彼を譏り、窘め、十字架に釘け劍にて其脅を刺すとも、我等に對して彼の心より出づる言辭は

父よ彼等を赦し給へ、其爲す所を知らざるが故なり

である、罪の赦免は最も著明かにキリストの死に由て顯はれた、神に此赦免あるを示されて如何なる罪人も神に近づき得るに至つた、キリストは誠に人が神に到るの途である、彼の死の事實を以てする罪の赦免の福音に接して、如何なる罪人も憚らずして神の寶座に近づき得るのである。

(二)キリストの死に由て我等の罪が示された、人は如何に惡しき者なる乎はキリストの十字架に於て顯はれた、彼を殺した者はユダヤの有司、祭司、學者、パリサイの人、サドカイの人、ヘロデの黨ばかりではない、全人類は彼等を以て神の子を十字架に釘けたのである、即ち我も亦此兇暴の罪に與つたのである、我も亦「十字架に釘けよ」と叫んだ者の一人である、我も亦棘の冕を編み、之を彼の頭の上に押附けて

血の流るゝを見て喜んだる者の一人である、詩人ゲーテは曰ふた

余は歳の邁むに循ひ、人の犯せし罪にして余の犯さゞる罪の無きを覺る

と、我等も若し我等の心の底を探り見るならば其中にイスカリオテのユダの罪、祭司の長カヤパの罪、ピラトの罪、ヘロデの罪を悉く發見するに相違ない、罪は神の子を十字架を釘けざれば止まない、罪の恐しさは髑髏山上に於けるキリストの死に於て顯はれた。

キリストの死は我等の罪を顯はし、又之を赦す神の愛を顯はし、又更らに進んで(三)赦されし我等に神の義を供す　使徒パウロの言辭を以て曰へば、キリストの十字架は人を罪に定め、定められし其罪を滌ひ、又更らに進んで彼を義とする、罪の增す所には恩も愈や增せり、人の罪が其極點に達せし所に神の恩の泉は湧き出でた、人の手が神の子の脅を刺したる時に生命の血と水とは永久に流れ出た、モーセが其手を擧げ杖をもて磐を擊ちければ水多く湧出て會衆と其獸畜共に飲みしが如く（民數紀略二十章十一節）、羅馬の一兵卒、其劍を以て神の子の胸を刺したれば生命の水と

血潮とは限りなく流出て世界の萬民は之を飲みて蘇生した、神の義はキリストの死に由て世に臨んだ、而して我等も亦悔ひたる心を以て彼に來りて彼の義を我等の有となす事が出來るのである。

而して十字架の此倫理的作用が使徒パウロの謂ふ所の贖罪であると思ふ、之を贖罪と言ふたのはキリストの生命を彼の血と言ふたと同然、パウロの猶太的思想より出たのである、贖罪は猶太人の祭事の言辭である、之れを今日の倫理思想に譯して言へば前に述べしが如くになるのであると思ふ、キリストの十字架が我等を救ふとは決して奇談ではない、是れ深き倫理的理由の其中に存することであつて、此神聖なる死があつて、罪の潔聖の行はれない理由はないのである。

キリストの血に就て

新約聖書は所々にキリストの血の效力に就て記して居る、キリスト御自身の言葉と

しては左の如きものがある、

イエス曰ひけるは誠に實に我れ汝等に告げん、若し人の子の肉を食はず、其血を飲まざれば汝等に生命なし、夫れ我が肉は眞正の食物、又我血は眞正の飲料なり、我が肉を食ひ、我血を飲む者は我に居り、我も亦彼に居る（約翰傳六章五十三―五十六節）。

然し、キリストの血の效力に就てはキリスト御自身よりも彼の弟子等に由て多く述べられて居る、使徒行傳に於て、書翰に於て、默示錄に於て此事に關する言辭は決して尠少くない、

主の己が血を以て買ひ給ひし所の教會（使徒行傳二十章二十八節）。

今、其血に由りて我等義とせられたれば、況して彼に由て怒より救はるゝことなからん乎（羅馬書五章九節）。

我等其血に由り、贖、即ち罪の赦を得たり（以弗所書一章七節）。

今はキリストイエスに在れば曩に遠かりし汝等はイエスの血に由りて近づけり

（仝二章十三節）。

其十字架の血に由りて平和をなし云々（哥羅西書一章二十節）。

血を流すことあらざれば赦さるゝことなし（希伯來書九章二十二節）。

新約の中保なるイエス及び其灑ぐ所の血（仝十二章二十四節）。

汝等が贖はれしは……疵なき汚なき羔の如きキリストの寶血に由ることを知る（彼得前書一章十八、十九節）。

其子イエスキリストの血、すべての罪より我等を潔む（約翰第壹書一章七節）。

彼等は……曾て羔の血にて其衣を滌ひ、之を白くなせる者なり（默示錄七章十四節）。

我等の兄弟は羔の血に因りて之（惡魔）に勝てり（仝十二章十一節）。

キリストの血を以て買はれたりと云ひ、キリストの血を以て贖はれたりと云ひ、キリストの血に由て平和を得たりと云ひ、キリストの血を以て滌はれたりと云ひ、キリストの血を以て潔められたりと云ひ、キリストの血を以て救はるゝと云ひ、キリ

ストの血を以て惡魔に勝つと云ふ、キリストの血の效力は千殊萬樣である、新約聖書記者の心よりキリストの血を取去て、福音の勢力のすべてが取去られるやうに感ずる。

乍然、聖書は斯くも呶々くしと思はるゝ程までにキリストの血の功德を述べて居るが、其何たる乎、或ひは何故たる乎は其言に由ては少しも解らない、血と云へば其中に何にか慘澹たる所があつて、悲哀の情が加はり、之を口に唱ふる者は何やら特別に深くキリストを愛するやうに聞える、乍然、是れ僅かに感情に止つて道理ではない、キリストの福音は深き感情を惹起す者であるが、然し、素々人の感情に訴へて彼を動かす者でない、「率我等共に論らはん」と神は今尙ほ人に向て言ひ給ふ（以賽亞書一章十八節）、「論らはん」とは道理に訴へて議論を闘はさんとの意である、キリストの脇より流出し血と水とを見て甚く心を動かせし者は十字架の側に立ちし婦人等である、乍然、其血は何を意味する乎、其血は如何にして萬國の民を救ふ乎、如何なる意味に於てすべて我等の罪を潔むる乎、是れ感情ではなくして道理の問題である、我等はキリストの血と其潔めとの明白なる意味を知らんと欲する、我等は何故にキリストの寶血が我等を救ふか、其理由を知て、深く其救拯に與らんと欲し、又深くキリストの贖罪の恩惠を感得せんと欲する。

言ふまでもなく、血は血である、赤血球と白血球と血漿との混合物である、其點に於て牛の血も羊の血も人の血も何の異なる所はない、余輩は憚らずして言ふ、其點に於てはキリストの血とて余輩の血と異らない、血は血である、キリストの血とて血である、血は如何なる物の血でも又如何なる人の血でも罪を滌はない、罪は心の事である、體の事ではない、血はたとへ之に浸されても人の罪を滌はない、縱令キリストの血であるとするも血其物は、即ち物質的の血は人の罪を潔めない、其事は誰が何と云ふとも明かである、余輩はキリストの脇より流出し血其物に何の效力をも認めない。

然れば何故にキリストの血、すべて我等の罪を潔むと云ふのである乎、何故に聖徒は彼の血にて其衣を滌ひ、之を雪の如く白くなせりと云ふのである乎、何故にキリ

ストの血は信徒に取り無上の効力があるのである乎、是れ我等の特に知らんと欲する所である。

新約聖書に謂ふ所の血の何たる乎を知らんと欲せば、之を舊約聖書に於て探らなければならない、血なる言葉は舊約に於て何を表號して用るられし乎、其事を先づ究むるの必要がある、而して此事たる、すべての宗教の根底義たる犧牲の何たる乎に渉る問題であつて、宗教上の最大問題であるが故に、今茲に委細に論ずる事は出來ないが、然し、左の三ヶ條の、舊約聖書に顯はれたる血に關する明白なる事實であることは誰も疑ふことは出來ない、

一、血は生命であること。

二、血を流すとは生命を棄つることである事。

三、血を灑ぐとは生命を他に移すことである事。

一、血は生命であるとの事は明かに舊約に示してある、肉の生命は血に在りと、即ち血其物が贖罪をなすのではない、血の中に生命が存するが故に贖罪をなすのである

と、生命は血を離れて存在する者である乎否やの問題は今茲に之を論究するに及ばない、我等はたゞ昔時のユダヤ人が血を生命の所在と認めたといふ事を知れば足りるのである、生命は血に於てある、故に血は神聖である、血を流すことは大罪惡である、蓋は是れ生命を奪ふことで、即ち殺すことであるからであると、此事を心に留めて、舊約聖書の左の言葉を解することが出來る、

凡そイスラエルの家の人、又は汝等の中に寄寓れる他國の人の中、血を食ふ者あれば我れ(エホバ)其血を食ふ人には我面を向けて攻め、其民の中より之を斷去るべし、そは肉の生命は血にあれば也、我れ汝等が之を以て汝等の靈魂のために壇の上にて贖罪を爲さんために之を汝等に與ふ、血は其中に生命のある故によりて贖罪をなす者なれば也(利未記十七章十、十一節)。

即ち犧牲はイスラエルの家の人等に由て無意義に献げられたのではない、之に或る深き心靈上の意味があつた、犧牲は言葉の如き者であつて心意の表號の一種であつた、神に生命を献ぐとの意義を以て牛や羊や犢が献げられたのである、表號は心意

を顯はすには足りない、如何なる表號と雖も充分に且つ完全に心意を顯はすことは出來ない、貞操は松を以ては充分に且つ完全に表はされない、然し松は貞操の善き表號である、悔ひたる碎けたる心の狀態(ありさま)は之を壇の上に屠られたる犧牲の獸(けもの)を以てしては充分に且つ完全に表はすことは出來ない、乍然、犧牲は懺悔の最も善き表號である、生命は血に在ると固く信ぜしイスラエルの人は神の前に獸の血を流して己の生命を神に獻ぐるの意を表した、人が此世に於て爲す事はすべて表號に過ぎない、而かも表號に強いのと弱いのと、深いのと淺いのとがある、而して犧牲は心の悔改を表はすための最も強い且つ深い表號である。

二、生命は血に於て在る、故に血を流すことは生命を奪ふことである、即ち死することである、或ひは殺すことである、而して罪を犯して死せざるを得ない、**罪を犯せる靈魂は死ぬべし**と(以西結書十八章四節)、**血を流す事あらざれば赦さるゝ事なし**と、ユダヤ人の信ぜし所に由れば罪と流血(卽ち死)との間には必然的關係があつた、使徒パウロも亦此信仰を變(か)へなかつた、彼は曰ふた**罪の價は死なり**と(羅馬書

六章二十三節)。

三、生命は血の中に在る、而して生命は又之を他に傳へることが出來ると、是れ又ユダヤ人の信仰の一つであつた、彼等は信じた、神は其生命を人に傳へることが出來る、人は其生命を他の人に傳へることが出來る、禽獸も亦其生命を人に傳へることが出來ると、所謂潔禮(きよめのれい)とは此信仰に基ゐて起つたものである、即ち潔き鳥の血を癩病より潔められんとする者の上に七回灑(そ)げば其人は潔められたりとの事である(利未記十四章三—七節)、此場合に於ては潔き鳥の生命が病める人の體に移りて、其人は潔められたりとの事である、即ち今日の言葉を以て言へば、玆に血清療法が行はれたのである。

以上は血に關するユダヤ人の見解であつた、其、吾人今日の見解と趣(おもむき)を異にするは言ふまでもない、ユダヤ人に取りては生命はすべて一つであつた、人の生命も禽(とり)の生命も獸の生命も皆な一つであつた、故に是等は相互に交換することが出來ると思ふた、彼等には又吾人に於けるが如く、肉的生命、智的生命、靈的生命と云ふが

如き區別はなかつた、彼等に取りては生命は唯一つであつた、パウロの左の言の如きは此邊の消息に通ずるにあらざれば解らない、

若しイエスを死より甦らしゝ者の靈、汝等に住まば、キリストを死より甦らしゝ者は、其、汝等に住む所の靈を以て汝等が死ぬべき身體をも生かすべし（羅馬書八章十一節）、

即ち靈的生命は肉的生命となりて働らくべしとの事である、生命の一元說は古くよりユダヤ人の信ぜし所である、今日の科學を以てしては未だ充分に證明することは出來ないが、乍然すべての哲學が一元論に傾きつゝある今日、輕忽に附すべからざる信念であると思ふ。

（一）血は生命である（二）血を流すことは死することである（三）血を人に灑ぐことは其人に生命を頒つことであると、以上が血に關するユダヤ人の思想であつた、而して此思想をキリストの生涯の事實に適用したものが新約聖書に顯はれたるキリストの血に關する思想である。

キリストの血とはキリストの生命である、而して人の生命は其人自身であるから、キリストの血と云ふはキリストと云ふと同じである、キリストの血に由て救はるゝとはキリストの生命に由て救はるゝと云ふ事であつて、又キリストに由て救はるゝと云ふと同じである。

又血を流すとは死すると云ふ事であつて、死に伴ふすべての苦痛をも合せていふ、故にキリストの血に賴りて義とせらるとか、又は十字架の血に由て平和を得たりとか云ふ場合には「血」は「流されし血」と解すべきであつて、死と之に伴ふ苦痛を指して謂ふのである。

「我血は眞正の飲料なり」と云ひ、「新約の中保なるイエス及び其灑ぐ所の血」と云ふ場合に於ては、血は永久にイエスより流れ出る生命であつて、之を受けて復活あり、又永生ありと云ふのである、「我血は眞正の飲料なり、……我血を飲む者は我に居り、我も又彼に居る」と云ふは同じ約翰傳の四章十四節に

我が予ふる水を飲む者は永遠に渴くことなし、且つ我が予ふる水は其中にて泉と

なり、湧出て永生に至るべし

とあると、唯、血と云ふと水と云ふとの違があるのみて其根底の意味は同じてある、故に默示錄二十二章十七節に於ては此水を稱して「生命の水」といふて居る、血と云ふと水と云ふと生命と云ふと終る所は同じてある。

キリストは如何にして人を救ひ給ひし乎と云ふに、犧牲の言葉を以て此問に答へて曰へば、

彼は自己を神の祭壇の上に捧げ、自から罪祭の禮物となりて其血を流し、神に對しては其怒を宥め、人に對しては其罪を擔ひ、以て人を神の前に執成し給へり

と、倫理の言葉を以て答へて曰へば、

彼は完全に人たるの本分を盡し、死に至るまて神を怨まず、人を愛し、彼の身を以て神を人に示し、人を神に導き給へり、而して彼れ死して彼の精神（彼の場合に於ては聖靈と稱す、靈的生命なり）益々人に傳はり、彼は今尙ほ彼の精神（靈的生命）を以て彼を信ずる者の中に在りて生き給ふ

と、ユダヤ人の祭事の慣例より全く脫却する能ざりし新約聖書記者等は犧牲の言葉を以てキリストに關はる彼等の靈的實驗を述べたのである、然れども此慣例に何の干與なき吾人は斯かる言葉に接して其意義を探ぐるに甚だ困むのである、吾人は之を今日の吾人の言葉に飜譯して讀まなければならない、古人の言葉を文字通りに解釋して吾人は大なる誤謬に陷らざるを得ない。

乍然、玆に一つ注意すべき事がある、即ち吾人が古人の言葉を吾人今日の言葉を以て解き去らざらんこと、其事である、即ち吾人の淺薄なる思想を以て古人の深淵なる思想を說了せざらんこと、其事である、今人の理想的なるに對して古人は寫實的であつた、殊に古代のユダヤ人は爾うであつた、理想は空想に傾き易く、隨て皮想に走り易い、精神と云へば一時の活氣なりと思ひ、生命と云へば肉體の精力である乎の如くに想ふ、然し、精神とは斯かる淺薄なる者てはない、生命とは斯かる薄弱なる者てはない、精神は聖靈てある、神より出る眞正の生命てある、若し生命を血と稱して迷信に傾く惧があるならば、血を單に生命と解して淺薄に流るゝの危險があ

る、靈的生命は單に生命としてイエスの身より流出るのではない、彼が紅き溫き生血を流して其結果として彼より流出て吾人の中に在て永生と成るのである、斯の如くにして古人の言葉を今人の言葉に譯して讀むの必要があるが、其れと同時に又今人の思想を古人の言葉を以て言表すの必要がある、我等は誠にキリストの血に由て贖はれ又潔められ、又救はれるのである、人間の不完全なる言葉を以てして、我等に在りて成就げられたるキリストの救拯を言表さんとするに之に優さりて適切なる言葉はないのである、我等がキリストに由て救はるゝと云ふのは哲學者に由て思想の新光明に引出さるゝと云ふ事とは違ふ、キリストが我等に予へ給ふ生命は世の所謂る元氣でもなければ又活氣でもない、是は深い靜かなる靈であつて、眞の眞、實の實である、我等は之を聖靈と稱し奉る、即ちキリスト御自身である、彼の人格の本體であつて、すべての生命の精髓である。

尙ほ一つ注意して置くべきことがある、其れは救拯に兩面のあることである、即ち消極的幷に積極的の兩面のあることである、救拯は其一面に於ては罪の消滅である、

他の一面に於ては生命の供給である、前者は一時的であつて、後者は永久的である、聖書の言葉を以て言へば我等は先づ我等の**反逆を醫**されなければならない（何西阿書十四章四節）、是れが所謂る贖罪である、罪は死を價ひする者であるが故に我等罪より救はれんと欲すれば、自身死に當る乎、然らざれば或る他の者が我等に代て死の苦痛を嘗めなければならない、然し乍ら救拯は此れ丈けにては成就げられない、死を免れし罪人は更らに義とせられなければならない、即ち正義の生命の供給を受けて自身、義人と成らなければならない、醫術の言葉を以て曰へば患者は第一に病根を取除かれなければならない、第二に之に續いて滋養物の注入に由て生活力を加へられなければならない、而して血を流す(shedding)は罪を除くために必要であつて、血を灑ぐ(sprinkling)は新生命を注入するために必要である、キリストの施されし救拯にも又此兩面があつた、彼は血を流して彼を信ずる者の罪を除き給ふた、彼は又彼等の上に彼の血を灑ぎ給ふて彼等を永久に活かし給ふ、十字架の血に由て民を贖ひ給ひ、彼より流れ出る血に由て彼等に永生を予へ給ふ。

今、以上の二つの注意を以てキリストの血に關する新約聖書の言葉を讀むならば其意味は較明瞭になるであらう。

「人の子の血を飲まざれば汝等に生命なし」と云ふは、イエスの生命を受けざれば生きて神の子たる能はずとのことである（約翰傳六章五十三節）。

「主が己が血を以て買ひ給ひし所の教會」とはキリストが十字架上の死を以て其罪を除き給ひし所の信徒の團體との意であつて、血は此場合に於ては前に述べし救拯の第一の意義に於て解すべきである（使徒行傳二十章二十八節。以弗所書一章七節も同じやうに解すべきである）。

「今、其血に由りて我等義とせられたれば況して彼に由て怒より救はるゝ事なからん乎」、「今」は此場合に於ては「既に」と解すべきである、既に其血に由りて我等の罪を除かれ、義人として神に納けられたれば（第一義）、況して今より後終末の裁判の日に至るまで、彼の生命の供給を受けて、潔められ且つ活かせられて終に神の子となりて救はるゝことなからんやとの意である（羅馬書五章九節）。

「今はキリストイエスに在れば曩に遠かりし汝等はイエスの血に由りて近づけり」曩に異邦人たりし汝等は今はイエスの生命、即ち子たる者の靈を受けてアバ父よと呼びて神に近づくを得たり云々（第一義に解す、然れども第二義の其中に含まれあるを見る。以弗所書二章十三節）。

「父なる神、福音に順はしめ、イエスキリストの血に灑がれしめんとて云々」信者に就て謂ふ、「イエスの血に灑がれしめん」とは「イエスの生命に與からしめんとの意である、基督者とならしめんとて、イエスと共に恥辱と榮光とを擔はさしめんとて云々（彼得前書一章二節）。

「其子イエスキリストの血すべての罪より我等を潔む」キリストの生命我等の中に降り、血清療法的に我等を潔むとの意である、即ち光明は來りて闇黒を逐ひやり、正義は來りて不義を消し、生命は來りて死を滅すとのことである、キリストの血が不可思議的に我等を潔むと云ふのではない、實際的に新勢力を以て汚れし我等を潔むとのことである、聖ヨハネは玆に單に宗教的信仰を述べて居るのではない、實驗

的事實を語つて居るのである（約翰第壹書一章七節）。

以上は解釋の實例に過ぎない、同じやうに新約聖書に於けるキリストの血に關するすべての章節を解釋することが出來ると信ずる、要するに聖書はキリストの血に於て不可思議的効驗を認めない、之に觸れやうと、染らふと、浸されやうと、血其物に何の効力もない、迷信と情動とを嫌ひし聖書記者は特に血の神秘的了解を避けんとして居る、其最も善き例は希伯來書の記者である、彼は曰ふて居る

若し牛及び羊の血、又牝犢の灰と雖も之を汚穢れたる者に灑ぎて其肉體を潔むることを得るとならば、況して永遠の靈に由りて瑕なくして己を神に獻げしキリストの血は汝等に活ける神に事へんがために死の行を去らしめて其心を潔むることを爲さざらん乎（希伯來書九章十三、十四節）。

即ちキリストの血が吾人をして死せる意義なき外形的の行を去らしめ、進んで吾人の心を潔むる所以は、彼が永遠の靈に由て瑕なくして己を神に獻げたからであるとの事である、彼の血其物に不可思議的の能力が存して居るからではない、彼が純愛

を以て之を神の前に流したからであると、即ち血の貴きは之を注ぎし精神に因るとのことである。

要するにキリストの福音は聖靈供給の福音である、吾人が潔めらるゝのも聖靈に由てゞある、永遠に救はるゝのも聖靈に由てゞある、「聖靈の供給」、福音の目的は之を以て盡きて居る、之を血と云ふも、水と云ふも、パンといふも唯言葉を變へて同じ事を言ふまでゞある、「子たる者の靈」、如何にして之を人に予へん乎、如何にして之を己に受けん乎、是れ神に取り、人に取り、最上、最後、最大の問題である、而して

其子イエスキリストの血すべて罪より我等を潔む

と聞いて吾人はアーメンと應へ、心の中に躍り喜び、迷信的にあらず、然ればとて又空想的にもあらず、事實中の事實、眞理中の眞理として此音信を受け、深き新らしき意味を附して古き讃美を唱ふるのである、

主にたよるたみの　みなひとしく

きよめらるゝまで　ながれたえじ
われいけるときも　死にてのちも
イマヌエルの血を　たゝえうたはん。

バウロの贖罪論

誤解されし教義

今日世に誤解され且つ濫用される教義にしてバウロの贖罪論の如きはない、今や是を否認し、排斥し、甚しきに至ては之を嘲弄するのが、識者を以て自から任ずる者の中に流行となりつゝある、一時は基督教を解する上に於て唯一の憑典として仰がれしバウロの書翰は今や殆んど聖書以外に放逐されんとする狀態に於てある。

是れは抑々どう云ふ理由である乎、バウロの贖罪論は果して背理背倫の說である乎、是れ果して信仰上並に道德上、何の價値もない說である乎、是れ大に考究すべき問題である。

成程、バウロの言にして之を其前後の關係より離して見て、不合理のやうに見える節のないではない、今其三四の例を擧げんに、

イエスは我等が罪のために附され又我等が義とせられんがために甦へらされたり、是故に我等信仰に由て義とせられたれば神と和ぐことを得たり、此は我主イエスキリストに由りてなり（羅馬書四章末節より五章一節まで）。

キリスト我等の猶ほ罪人たる時、我等のために死に給へり、神は之によりて其愛を彰はし給ふ、今、其血に由りて我等義とせられたれば況して彼に由りて怒より救はるゝ事なからん乎（同五章八、九節）。

又キリストの代りて死に給ひし弱き兄弟云々（哥林多前書八章十一節）。

神と人との間に一位の中保あり、即ち人なるキリストイエスなり、彼れ萬人に代

り己を棄て贖ひとなせり（提摩太前書二章五、六節）。

以上は三四の例に過ぎない、爾うして之に類したるバウロの言は決して少くない。

爾うしてバウロの是等の言葉を其儘に解して今日基督教會に於て唱へらるゝ贖罪說なる者が出たのである、今之を簡約めて云へば大略左の如き者である、

人は生れながらにして罪人である、故に彼はいくら勵みても己を神の前に義とすることは出來ない、故に神は憐愍の餘り其獨子を降し給ひ、彼を十字架に釘けて人に代りて其受くべきの罰を受けしめ給ふた、キリストの十字架は一方に於ては聖なる神の怒を宥め、他の一方に於ては惡なる人の罪を潔めた、斯くて彼は二者の間に立て中保となつた、人は今や自己の善行に由ることなくして、唯信仰を以てキリストの功績を己がものとして受け、之に由て神に近づくことが出來る。

然し斯かる教義に對して强き反對が起らざるを得ない、今、贖罪論に對するすべての反對說を茲に述べることは出來ない、唯其中最も有力なる者二つを擧げんに、即ち左の通りである、

其一、贖罪論は論理的には不合理なり、そは人は各自、己の罪を擔ふべき者にして、神と雖も彼に代て之を擔ふ能はざれば也。

其二、贖罪論は實際的に甚だ有害なり、そは若し善行以外に義とせらるゝの途ありとすれば、人は善行を忘り、神を信ずると稱しながら惡を行ふに至るべければ也。

爾うして贖罪論は此反對論に對して容易く己を辯護することが出來ないのである、意志自由說は倫理學の根本義とも稱すべき者である、爾うして贖罪論は此根本義に牴觸する、又極端なる贖罪論の道德的害毒は人の一般に認むる所である、所謂「神學者の憎惡」と稱し、宗教家が宗教論を鬪はしながら、仇恨、爭鬪、妬忌、結黨等のすべての不義背德を行ふて恥とせざるの醜態は我等の屢々目擊する所であつて、是れ主として贖罪と云ふが如き、善行以外に人を義とすると稱する教義が彼等に由て懷かるゝからである、贖罪論は論理的に不合理（アナサード）であつて、實際的に不道德（イムモーラル）であると云ふ者が有ても强ち之を排斥することは出來ない。

然し乍らタルソのバウロは果し て斯かる不合理、不道德を唱へたのであらふ乎、今日世に稱する所のバウロの贖罪論なる者は果して彼れバウロの所信であつたのであらふ乎、バウロは意志の自由を拒み、神を信ずると稱しながら罪を犯すの機會を後世に供したのであらふ乎、余輩は斯く信ずることは出來ない、余輩は今日基督教會に由て唱へらるゝバウロの贖罪論なる者に就てバウロ自身は責任を有たないと思ふ、是れ全くバウロを誤解するより出たる者であると思ふ、即ち多くの他の事に於て教會が使徒の名を濫用し、使徒をして教會の犯せしすべての罪惡を擔はしめしと同じく、贖罪論に於ても、教會はバウロをして、己の陷りし誤謬の責任を負はしめたのである、余輩はキリストの弟子であつて、バウロの弟子ではないから、何事に關はらずバウロに推服する者ではない、然し乍らバウロの贖罪論を不合理的に、又不道德的に解せしめし責任は教會に有てバウロには無いと思ふ。

バウロは純正のユダヤ人である、

我は第八日に割禮を受けたる者にしてイスラエルの族ベニヤミンの支派、ヘブル人より生れたるヘブル人なり

とは彼の自白である(腓立比書三章五節)、爾うして此遺傳を承けたる彼は哲學者ではなかつたとするも、峻嚴なる道德家であつた事は確かである、故に彼は彼の傳へし教の中に論理の法則に適はない者があると聞いても別に意に留めなかつた乎も知れないが、然し道德に反く者があつたと聞いたならば、彼は堪えられぬほど驚いたであらふ、實に彼はキリストの贖罪に就て述ぶるに方て、彼の反對論者が斯かる駁論を彼に向て放たんことを慮り、豫め之に答へて曰ふた、

然らば我等何を言はんや、恩の增さんために罪に居るべき乎、非ず(羅馬書六章一節)

と、玆に「非らず」と譯されし其原語は激烈なる言辭である、me genoito「堪え難し」とか、「否な決して否らず」とか、「思ひも寄らず」とか譯すべき者である、少しく言辭を更へて曰へばバウロは左の如く言ふたのであらふ、

キリストが罪を贖ひたれば我等は罪を犯すも問はれずとよ、堪え難き哉、斯言や

と、キヲストの贖罪が善行怠慢の機會として用ひられるとはパウロに取ては堪え難きことであつた、そは是れパウロが求めた目的の正反對であつたからである。

然らばパウロの贖罪論は如何に解すべき者である乎。

第一 に我等はパウロの受けし嚴格なるユダヤ的教育を忘れてはならない、贖罪はユダヤ人の思想を占領せし主なる題目であつた、舊約聖書、殊に其中の出埃及記、利未記、民數紀略を讀んだ者て、其中に贖罪の文字の如何に多きかに氣の附かない者はない、

汝日々に罪祭の牡牛一頭を獻げて贖ひをなすべし、又壇のために贖罪をなして之を潔め、之に膏を灌ぎ、之を聖別むべし（出埃及記二十九章三十六節）。

即ちアロン己のためなるその罪祭の牡牛を牽き來りて自己と其家族のために贖罪をなし、云々（利未記十六章十一節。全章に渉り贖罪の文字甚だ多し）。

是れ其一二の例である、爾うして舊約聖書全體に渉り、贖罪の文字と思想とは充ち滿ちて居る、實に舊約教、之を贖罪教と稱しても可い程である。

爾うして斯かる思想の中に生育せしパウロが其キリストに由る救濟觀を組織するに方て之に贖罪の文字と思想とを編入したのは決して無理ならぬことである、舊約聖書に現はれたる贖罪其物の意義は余輩の今茲に索ねんと欲する所ではない、乍然、パウロの地位に在りし者が新らしき人生觀を編出すに方て、自己と周圍の人との贖罪的觀念を滿足せしむるの必要を感じたのは止むを得ない事であつた、恰かも今日の吾人に取り、進化論に論及せずして如何なる思想をも世に提出することが出來ないと同然である、パウロは二千年前のユダヤ人であることを心に留めて、我等は贖罪論の不合理を以て彼を責めない、贖罪は當時の定說であつた、之れとの調和を講ぜずしてキリストの福音を說くも無益であつた、パウロは曰ふたのである、贖罪は罪人が神に近づくに必要である、然し罪は牛や羊の血を以て贖はるべき者ではない、人の血を以てのみ贖はるべき者である、眞正の罪祭は神の羔なるイエスキリストを以て供物とすると。

第二、パウロに取りては彼が贖罪論を唱ふるに明白なる道德的理由があつた、それ

は彼の謙遜である、彼は自己の善行に由て彼が神に納けられやうとは如何しても思ひ得なかつた、然ればとて彼の如き實際的觀念を以て養成されし者は神は何の條件をも附せずして自由に人の罪を赦し給ふと聞ても容易に之を信ずる事は出來なかつた、茲に於てか彼に取りては罪の赦免の實證が必要であつたのである、爾うして彼は此實證をキリストの苦難と死に於て發見したのである、神の聖きと自己の穢れたるとを比べて見て彼は何かキリストの十字架のやうなるものを要求して止まなかつたのである、彼は今日の多くの自稱善人のやうに、神は人の罪を赦すべき筈の者であるとか、人は神の子であるから懼れなく神の膝下に近づくべきであるとか言ひて己を慰めんと欲するも慰め得なかつたのである、彼は神を見ることあまりに高く、自己を見ることあまりに低くありしが故に、二者の間に渡りを附くる仲裁人を要求したのである、即ち贖罪の犧牲を携へて聖所に入りて神の前に人を執成す所の祭司の長を要求したのである、パウロの如く神を高く見ると同時に自己を低く見る者にあらざれば贖罪の必要は感ぜられないのである、自己の皆無なるを信じ、又自己の

爲し得る善行の皆無なるを信じて茲に始めて贖罪の必要が起るのである、若し贖罪其物が不合理であるとするも、その之を喚起せし動機は實に貴いものである、贖罪を標榜して神學論を闘はすのは最も嫌ふべきことであるが、然し贖罪を要求して止まざるの心は最も貴むべき心である、パウロの謙德の表彰として彼の贖罪論は最も貴重なる者である。

第三、贖罪は人生の事實である、故に實驗すべきものである、實驗を離れて理解し得らるべき者ではない、其内容は門外漢の探り得べき者ではない、之を不合理なりと稱するは之を單に外より觀察するからである、之に道德的危險の伴ふはその實驗が淺いからである、贖罪を深く心に味ひて、その道理の頂上、道德の極處であることが判明るのである、故に是れは何人にも判明る教義ではない、パウロを待て始めて陳述せられ、パウロに達して始めて了解し得らるゝ教義である、實驗は學問ではない、實視である、直感である、哲學者が之を解し得ないのは敢て怪むに足りない、又淺薄なる今の教會信者が之を濫用して却て危害を己が身に招くも敢て怪むに足り

ない、事實は事實である、贖罪は贖罪である、之を解し得ないとて之を排斥するは、太陽の熱を以て己が煙管に火を點じ得ないとて之を譏るの類である、バウロは彼の信仰的實驗を語つたのである、彼の靈魂の聖所に入て、彼が見、又聞き、又捫りしことを語つたのである、爾うして外に立て遙かに幕内の聖事を覗がふ者は之を疑ひもし、否みもするであらう、然れども挈へられて第三の天に至り、言ふべからざる言、即ち人の語るまじき言を聞きし者は又人の説明すべからざる深き聖き事を知るのである、バウロの贖罪論は不合理なりとて又不道德なりとて直に之を排斥すべきではない。

* * * * * *

身をバウロの境遇に置き、同情を以て彼の思想の徑路を稽へ、バウロの謙遜を以て彼の如くに高く神を見、低く自己を見、終りに、贖罪を哲學上の命題として見ずして人生の實驗として見て、我等は今の人の如くにバウロの贖罪論を否認もせず、排斥もせず、勿論嘲弄もしない、縱し又時には不合理的に見ゆる事があるとするも、

その偉人の唱へし大教義なるを知るが故に充分の尊敬を以て之を迎へ、自身バウロの如き者となりて之を道理的に解釋し得るに至る其時期の一日も早く到來せんことを祈る。

贖罪の眞義と其事實

今や「我は贖罪を信ぜず」と公言して憚らない基督信者が澤山居る、彼等は贖罪はキリストの福音の中に無い事であつて、後世の教會が造出した事であると云ふ。余輩とても勿論粗雜なる贖罪説を信じない、外國宣教師に由て傳へられ、教會の信條として强いらるゝ所謂贖罪の教義を信じない、乍然、贖罪の眞義と其事實とは之を信ぜざらんと欲するも得ない、余輩は之を取除いて福音の眞價を認めることは出

來ない、眞正の意味に於ての贖罪は今に至るも尙ほ余輩の信仰の根本である。

贖罪の文字が甚だ嫌はしき者である、贖ふとは奴隷制度の行はるゝ國に於て起つた辭であつて其中に多くの嫌はしき思想が籠て居る、贖ふは買ひ戻すであつて、賣られし者を買戻すの意である、人類が罪を犯せし結果として惡魔の手に附されしが故に、神は其獨子を代償として彼(惡魔)に附して、人類を其手より取回し(贖ふ)たりと言ふが如き、或ひは同一の結果として人類が忍れる神の手に附されしが故にキリストは己が血を流し、其血の代償として神は人類を釋き放ち給へりと言ふが如き、神を愛と見る余輩には到底承取り難い說である、贖罪を文字なりに解して之に忌むべき嫌ふべき節が澤山ある。

乍然、文字の嫌はしきは其實の嫌はしき理由とはならない、若し文字を云ふならば神と云ふも決して慕はしき文字ではない、日本語の加美は單に「上」の意であつて、政府又は役人のことであると云ふ、然し、我等は神を拜すると言ふて大臣や知事を拜するのではない、又英語の God は Woden であつて、元は北歐の神話より出た辭

であると云ふ、然し英米人がゴッドに事ふると云ひて半神的英雄ヴオーデンに事ふるのでない事は明かである、名は表號に過ぎない、我等が神と言ひ、ゴッドと稱する者は實は名を附し難き者(The Unnamable One)である、我等はたゞ之に便宜の名を附して我等の言難きことを言表はさんとするまでゞある。

贖罪とても同じである、贖罪は人智が今日の如く進步せざる時に人が適用した文字である、然れども、其、之に由て表明せらるゝ事實は此文字を以て言盡されるものではない、此粗雜なる文字の中に深い微妙なる意味が籠つて居る、我等は其文字を責むる前に之に由て言表さるゝ事實を探るべきである、之を爲さずして、文字の嫌はしきが故に、その之に由て言表はさるゝ深い貴い事實までを斥くるは識者の爲すべき事でない。

贖罪の意義とは何ぞ、英語で贖罪を atonement と云ふ、爾うして atonement は at-one-ment であると云ふ、即ち一つになることであると云ふ、今まで分離して在りし者が或る手段に由りて一つになること、是れが atonement 即ち贖罪であると云ふ。

Atonement は又 attunement であると云ふ、而して attunement は調子を合はすの意であつて樂器の調子を協はす事である、即ち不調に居りし者が或る手段に由て和合する事である、單に一つになると云ふよりは稍や深い意味に於ての和合をいふ。

然し、一つになると云ひ、調子を合はすと云ひ、其中に贖ふとの意義は無い、atonement は其語原より推して見て贖罪と直譯することの出來る辭ではない。

贖罪の事實を表明するために聖書に三つの言辭が使はれてある、贖ひと譯せられし希臘語の apolutrosis（羅馬書三章二十四節、以弗所書一章七節、哥羅西書一章十四節等）、和らぎと譯せられし katallagē（羅馬書五章十節、哥林多後書五章十八、十九節）、挽回の祭物（なだめのそなへもの）と譯せられし hilasmos（約翰第一書二章二節、仝四章十節）是れである、贖罪の譯字は第一の希臘語より出た者である、贖ひとは代價を拂て囚人を釋放すること、和らぎとは不和に居りし者の間を調和すること、挽回の祭物とは全然宗教上の言辭であつて、供物を獻げて神の忿怒を宥めるといふことである、罪の奴役より放つ贖ひ、神との不和を調ふ和らぎ、神

の忿怒を宥むる祭物、キリストの生と死とを三方面より觀たる觀察である、贖罪のみではない、調和である、單に調和と云ひて盡きない、挽回の祭物であると、キリストは完全の救主であるから、目的と同時に手段である、神と人との調和は目的であつたが贖罪と犧牲とは此目的を達するための必要手段であつた、而して猶太人たる聖書記者の立場より見て何れの方面より見るもキリストは完全に人類の救主たる本分を盡し給ふたのである。

乍然、調和にも深いのと淺いのとがある、人と人との調和に於ても、單に好意の交換丈けでは遂げられないものが多くある、若し强く感情を害せられ、名譽を傷けられ、人權を蹂躙せられし場合に於ては調和は決して容易の業でない、之に仲裁も要る、賠償も要る、謝罪も要る、いくら双方又は一方が仁慈、高潔の人であるとするも、踐むべきの道を踐まざれば調和は遂げられない。

神と人との關係に於ても同じである、調和は容易であるやうで容易でない、縱し神は無條件にて赦すと言ひ給ふとも人は斯かる赦免を信ぜんと欲して信ずることが出

來ない、是れ何にも必しも彼の心が頑剛にして疑念深いからである計りではない、是れには深い靈性上の理由が在るのである、靈と靈との關係は物と物との關係に異ならない、即ち二者共に或る法則に從はざれば和合一致する事は出來ない、木の性を考へ、石の質に循て二者の結合を計るにあらざれば結合は決して永久的のものでない、木と石とを合せんと欲してもたゞ單に結合を望んだ丈けでは出來ない、其如く聖き神の靈と穢れたる人の靈とは或る一定の法則に由てのみ和合一致することが出來る、物と物との間に物質的法則即ち天則が行はるゝやうに、靈と靈との間に靈的法則即ち道義が動らいて居る、此法則に從はずして、縱令父子たりと雖も其親しき關係を持續することは出來ない、神は愛なりと云ひて彼はすべての法則を離れて動らき給ふ者のやうに思ふは大なる間違である。

而して贖罪の文字を以て表はされたる靈性上の事實は一たび破れたる神と人との關係を回復するに必要であるのである、仲裁者あり、罪の消滅あり、神の側に於ては慈悲の振興あり、人の側に於ては悔改の喚起ありて始めてより高き靈とより低き靈

とが相抱合し、相接吻するのである、ナゼ爾うである乎と問ふ者があれば、事實爾うであると答ふるまでゞある、斯くするは靈の法則である、靈は斯くせざれば和合一致せざる者であると云ふまでゞある、靈にも亦其自然性がある、即ち其特性と常習とがある、ナゼ爾うである乎は問ふも無益である、ナゼ鳥は飛んで、蟲は匍うか、ナゼ水は流れて石は重いか、ナゼ仲保者の血と涙とに破れし友誼を恢復するの能力がある乎、此等の問題に對して吾人は「神斯く命じ給へり」とか、「是れ彼等の自然性なり」とか答ふるより他に途がないのである。

キリストの死が神と人とを和合一致せしむるに於て非常の能力を有することは歷史上の事實である、又吾人の實驗である、吾人と雖もキリストの十字架を知る前に神を識らないではなかつた、然れども十字架を知て後の神に關する吾人の智識と之を知らざる前のそれとの間には霄壤も啻ならざる相違がある、又十字架を知りし前にも吾人に罪の悔恨なる者があつた、乍然、十字架を知て後に始めて眞正の悔改が起つた、十字架なしの神は至て低い神であつて、十字架なしの悔改は至て淺い悔改であ

る、キリストの十字架に由て神に對する吾人の態度に大變化が來た、ナゼ來た乎は吾人の悉く說明し得る所でない、然し來たこと丈けは何よりも明白なる事實である。依て知る、調和は贖罪以上の事實なることを、調和は贖罪なりと見たのは大なる間違であつた、然し、贖罪なしに調和のない事は確かである、贖罪は罪の免除であつて調和の一要素である、罪の免除なくして神と人との間の調和はない、人類の罪が或る深き意味に於て根本的に取除かるゝまでは彼は再び聖き神と親むことは出來ない。

要するに贖罪は調和の消極的一面である、故に調和は贖罪丈けでは足りない、之に勿論積極的方面がある、罪を除くと同時に新たに義を起すの必要がある、傷を癒すに止まらず、新たに生命を供するの必要がある、キリストの事業は單に神と人との破れたる關係を恢復するに止まらない、彼は平和を克復して後に更らに平和を增進し給ふ、彼は人に代て其罪を除きしに止らず人に代て義を完全に行ひ給ふた、神は完全き者である、而して完全からざる者は神の子と成ることは出來ない、然るに吾

等は皆な完全からざる者である、迷ふたる羊である、玆に於てか何人が吾等に代て完全き者となり、吾等は或る方法に由り、或ひは吾等に供せられし或る性能に由て、其完全を吾等の完全となすことが出來なくてはならない、若し斯かる事は吾等が如何に望むとも絕對的に爲す能はざる所であると言ふならば吾等が神の子となるは絕對的に不可能事である、神は汚穢に耐ゆる人の如き者ではない、絕對的に聖なる神は其子より絕對的の聖潔を要求し給ふ者である。

誰か之に堪えんやである、女の生みし者にして此要求に應じ得る者は一人もない、然れども一人の此要求に應じたる者がある、其人は人類の救主なるイエスキリストである、彼れのみは完全なる人であつて、又完全なる神の子である、而して人は信仰の性能に由て彼れキリストの完全を己が完全とすることが出來るのである、是れ大なる奧義である、然し、奧義であればとて人の實驗に上らない事ではない、神の完全を戀慕ふ衆多の人は此實驗を經て神と結ばれ、凡て思ふ所に過る平安を彼等の心に感得しつゝある。

贖罪、atonement, katallagē, reconciliation、文字は何でも可い、然し事實は事實である、罪の重荷は單に言辭を以てしては取除かれない、又神の正義は單に議論を以てしては臨らない、罪なき者が罪ある者のために苦み、聖き者が聖からざる者のために盡して、罪は消え、義は溢るゝのである、余輩は贖罪の事實を信ずる、之を其量り知られざる深き廣き微妙なる意義に於て信ずる。

パウロ微りせば

余は時々思ふ、若し使徒パウロが居らなかつたならばサゾ好つたであらふと、其時は煩はしき神學なる者は無くして、隨つて教會もなく教派もなく、唯單純なるキリストの教訓のみ存して、基督教は實に單純無垢の者であつたであらふと、パウロは

確かに神學の元祖である、彼微りせば基督教は今日の如く面倒なる、込入つたる者で無つたに相違ない、余は實に或時はパウロの居らざりしことを望む者である、又は居りしも彼の書翰を新約聖書の中より取除きたく欲ふ者である。

山上の垂訓、放蕩兒の話、是れで基督教は足りて居るではない乎、何を好んで神の愛に就て論究するのであらふ乎、パウロは基督教を無理に、又無益に困難くした者ではない乎、彼は基督教を神學化した者ではない乎、パウロの在りしことは基督教に取りて最も悲むべきことではない乎。

然かし是れは一時の感である、基督教を極く淺薄に見た時の感である、殊に余の罪、余の救濟に就て深く感じない時の感である、パウロは基督教を困難くしたのではない、深くしたのである、人の心の奥底にまで達する宗教としたのである、キリストの教訓を傳ふるに止まらずして、其性格を究め、之に由て人の行爲に止まらずして其本性までを改造するに足るの眞理を啓發したのである、實にパウロに由て基督教は宗教となつたのである、道理に合ふキリスト崇拜はパウロを以て始つたのである、

福音書の示すキリストは主としてラビ(教師)としてのキリストである、**ラビ我等爾は神より來りし師なりと知る**とニコデモはキリストに向つて曰ふた、爾うして是れが福音記者が主に傳ふるキリストである、爾うして若しキリストが其れだけの者であるならば彼は孔子、釋迦、ソクラテスと類を同うする者である、大なる教師、聖賢の一人、而かも其最も大なる者、其れだけである、彼の血、彼の死、彼の復活、彼の昇天に、我等人類の生命に關はる大なる眞理が含れて在るとのことは主にパウロに由て闡明せられたことである。

キリストに倣ひ、彼の如く謙遜に、彼の如く柔和に、彼の如く勤勉に、彼の如く慈悲なることが我等基督信者の目的であることは言ふまでもない、然しながら罪に沈める我等をしてキリストの完全に達せしむるの途に就ては我等は之を福音書が示すキリストの教訓以外に於て求めなければならない、福音書は人が神に到るの途を示して居る、然かしパウロは特別に人がキリストを通うして神に到るの途を示した、パウロは明白に人と神との間にキリストを置いた、爾うして、斯くして人と神との

關係を間接にして、二者の間を離したやうではあるが、然し神人間の中保者を確定し、二者を繋ぐに愛の純金の鏈を以てした、間接なることは必しも疎遠なることではない、否な、直接の關係は多くは破れ易い關係である、媒介者に由らざる夫妻の關係の如き、慈母の愛を以て繋がれざる父子の關係の如き、直接にして返て危き關係である、神と人との關係も其通りである、直接なるは望ましきやうなれども、實は維持するに最も困難なる關係である、勿論神の場合に於ては彼より進んで人との關係を絶つが如きことは無しと雖も、人が神の愛を誤解し、彼の正義を忿怒と見做し、終に彼を離れ去るの場合は澤山ある、キリストは人を固く神に繋ぐために必要である、キリストを明かに中間に居いて神と人との關係を間接ならしめしパウロは兩者の關係を非常に強めた者である。

人は行爲に因て救はるゝのではなくして、信仰に因て救はるゝのであると言ふたパウロは如何にも善行を輕視めたやうにも見える、爾うして或る場合に於てはキリストの行爲其儘を眞似て、自我以外の力に賴まない方が救濟の捷路であるやうに見ゑ

ることがある、然しながら是れ我等の心に永久の平康を與へる途でないことは、是れ亦明かなる事實である、人は行爲に因て救はるゝに非ず、信賴に因て救はるゝのであると聞いて永久の平和は初めて我等の心に臨むのである、我等弱き罪人の完全に爲し得ることは實に信賴の一事である、仁愛、喜樂、慈悲、良善、溫柔、撙節、是れ我等が爲さんと努めて滿足に爲し得ることでない、是れを完全に爲し得ることが救濟であるとならば、我等は失望せざるを得ない、然し我等に一事完全に爲し得ることがある、其れは卽ち信賴卽ち信仰である、我等は神の慈悲と恩惠と宥恕とを充分に信ずることが出來る、此意味に於ての完全の信仰は罪人なる我等と雖も容易に懷くことが出來る、然り、我等の罪が深ければ深い程、此信仰を懷く事が容易である、恰かも病人の疾病が重ければ重い程、醫師に賴るの心が强くなると同じである、爾うして此心が神を歡ばしたてまつるに最も貴い最も實効ある心であると敎へられて、我等は始めて永遠より永遠に涉る深い强い堅い淸い平和を全身に感ずる事が出來るのである、人は信仰に由て義とせらるゝとは實にキリストの福音の眞髓である、

此事なくして福音は福音でない、爾うして此事を最も强く、最も明らけく、且つ最も繁く宣べた者は使徒バウロである、人は信仰に由て救はるゝとは神學的命題ではない、是は深き宗敎的信念である、基督信徒の平和の依て立つ土臺を一言以て表白せる者、是れが信仰に因て救はるゝとの敎義である。

バウロは確かに基督敎神學の元祖である、バウロの基督論なくして後世のすべての煩雜なる基督論は無かつたであらう、然しながら玆にバウロの神學に就て一事我等が忘れてはならない事がある、卽ち**バウロの神學たる神學のための神學ではなかつたこと**、是れである、然り、バウロの神學たる新たに神學を建てるための神學ではなくして、舊き死せる無用なる神學を壞つためのの神學である、バウロの神學は明かに反神學的である、多分バウロ程神學論を嫌つた者はあるまい、乍然、己れ神學を以て育られし彼は神學を壞つために神學を用いたのである、彼は敵を屠るに其武器を以てしたのである、彼は單純なるキリストの福音を愛した、然るに彼の敵が神學の紛糾を以て彼を縛らんとせしが故に、彼は同じ罔羅を以て己を護り、又其敵を壓

伏せんとしたのである。

其れが故に今に至るも神學の繰綫を斷つに最も有効なる武器はバウロの書翰に顯はれたる彼の神學論である、猶太神學を破らんために物せられたるバウロの神學論は羅馬天主教神學を破るためにも、英國監督教會神學を破るためにも、米國の數限りなき宗派神學を破るためにも有力である、**今より後誰も我を擾はす勿れ、我れ身にイエスの印記を佩びたればせ**（加拉太書六章十七節）と、此確信に基きしバウロの神學は如何なる神學をも掃攘するに足る、又如何なる神學も此確信に基く彼の神學を覆へすことは出來ない、バウロは確かに神學者であつた、然かし神學研究を目的とする今の神學者の如き者ではなかつた、彼の神學は神學掃攘のための神學であつた、故に實際的に最も有益なる神學であつた、神學が悉くバウロの神學の如き者となつて、信者も教會も神學の害を蒙らざるに至るのである。

バウロ微りせば、然り、バウロ微りせば基督教は業に既に消へて了つたであらふ、或ひは今尚ほ存して居つたにせよ、アルメニヤの山中、或ひは黒

海の濱あたりに小なる一宗教として存して居つたであらう、バウロ微りせば基督教は世界的宗教とはならなかつたに相違ない、隨つて我等極東の住民は終生之を目にも耳にもすることが出來なかつたに相違ない。

爾うして是れ必しもバウロの傳道區域の世界的なりしにのみ因るのではない、散布の區域は如何に廣くとも生氣の薄い種は永くは繁殖しない、基督教がバウロに由て世界的になり、又永久的になつたには地理的以外何にか他に理由がなくつてはならない、爾うして其れがバウロの傳へし教義の性質に存せしことは言ふまでもない、バウロに由りて基督教は濃厚にして精鋭なる者となつた、福音其物は美は美であつたが、然かしまだ人、殊に罪人の良心を刺通し、其暗處に存するすべての邪惡を露出し、之を神の前にまで引き來りて、赦免の恩惠に與からしむるには足りなかつた、人の罪の餘りに大なる、優さしきイエスの言のみにでは之を滅すに足りなかつた、故に神は罪に生れしバウロを起し、彼をして己に罪の赦免の恩惠を充分に味はしめ、世界の萬民をして彼に由て同じ恩惠に與からしむるの途を設け給ふたのである。

實に四福音書は我等の良心の外より働らき、バウロの書翰は其裏より働く、前なる者は太陽の如く、其和煦を以て外より我等を煖め、後なる者は地中の水の如く、其濕潤を以て裏より我等を萠芽さしむ、イエスの恩惠我等を取卷き、使徒等（殊にバウロ）の勸告我等を勵まして我等は終に救はるゝのである、使徒等の遺せし書翰は實に福音の半分である、是れなくしてはイエスの教訓も充分に其目的の効を奏しないのである、若し**大なる使徒にも劣らず**（哥林多後書十一章十二節）して働らきし使徒バウロがなかつたならばイエスの福音も半は其救靈の能力を失ふであらふ。

故に近頃我等の屢々耳にする「バウロよりイエスに還れ」との或る神學者等の聲は全く謂なき聲である、我等はバウロを離れてイエスに還ることは出來ない、我等はバウロに由てイエスに携來られた者である、故に若しバウロを離れるならばイエスをも離れざるを得ない者である、バウロに由て觀ざるイエスは我等罪人を救ふためには至て能力弱きイエスである、バウロは我等がイエスを其萬善の神性に於て解するために必要である、バウロなくしてイエスは解らない、バウロなくして基督教は

消えて了ふ、バウロはバウロのために貴いのではない、彼は神の遣し給ひし使徒として貴いのである、彼は**神の定めし旨と預め知り給ふ所に應ひて**（行傳二章廿三節）遣された者である、故に我等彼を排斥して終には神を排斥するの罪に陷らざるを得ない、故に余は今も尙ほ敬虔以てバウロの書翰を研究し、四福音書同樣、神の言として之を戴く者である。

義とし給ふとは何ぞや

神は自己を信ずる者を義とし給ふと云ふ、それは抑々何う云ふ事である乎。義とし給ふとは義人として宣告し給ふと云ふことではない、神は單に裁判官ではないから、彼は罪人に無罪を宣告し之を放免して以て足れりとは爲し給はない、神に

在りては義とし給ふとは遙かに意味の深い事である。

義とし給ふとは一には義と成し給ふとのことである、即ち義しき心を罪人の衷に造り給ふと云ふことである、是れ人には出來ないことであるが、然し神には出來る、彼は悔ひたる罪人のために**聖き心を造り、その衷に直き靈を新たに起し給ふ**（詩篇五十一篇十節）、神に在りては罪の赦免は單に法律的の赦免ではない、事實的の赦免である、神は罪人を赦して彼を事實的に義人と成し給ふにあらざれば滿足し給はない。

義とし給ふとは又義として顯はし給ふと云ふことである、即ち衷なる義に適ふ外なる裝を以てし給ふと云ふことである、神に在りては人の救濟は彼の全性の救濟である、即ち彼の靈と體との救濟である、神は人を衷に義と成し給ふに加へて亦彼を外に義とし給ふ、即ち彼に義人相當の境遇を供し、人と天使とをして彼を義人として認めしめ給ふ、彼に義人相當の地位を與へ給ふ、義人相當の衣を以て彼を裝ひ、彼に冠らすに義の冕を以てし給ふ、義人は何時までも神の前にのみ隱れたる心の義人として立つべき者ではない、彼は終に人の前にも義人として立てらるべき者である、神が彼を義とし給ふと云ふ事の中には彼の終局の榮達も含まれて在るのである。

衷に義と爲られ、外に義とせらる、義の心を與へられ、義人相當の境遇に置かる、神に義とせらるとは此事である、勿論、衷に義とせらるゝは先きであつて、外に義とせらるゝは後である、神は人と異なり、善き境遇を供して善き人を造らんとは爲し給はない、神は境遇に反して善き人を造り給ふ、神に在りては境遇の結果たる心ではない、心の結果たる境遇である、義人は始め義のために責められて、後に義の冕を着せらるゝのである。

義者の甦り（路加傳十四章十四節）と云ふは此事である、即ち義人が再び體を以て顯はれ、其外形上の報賞に與かると云ふことである、肉の世に在りては單に衷なる義人として神にのみ其義を認められし者が靈の世に甦りて人と天使との前に其義を發表せらるゝと云ふことである、義人榮達の時期、それが復活である。

神は來らんとする世に於てすべての義人を義とし給ふ、即ち義人を義人として顯は

し給ふ、然れども此世に於ても亦彼は或る範圍に於て義人に義の報賞を下し給ふ、

謙遜とヱホバを畏るゝ事との報は富と尊貴と生命となりと（箴言二十二章四節）、縱し多くの場合に於て義の報賞は義人其者の上に來らないとするも、彼の子孫か又は彼の國の上には必ず來るやうに見える、此罪惡の世に於ても確實の富貴と稱すべきものはすべて義の結果である、義人が血を流して守つたる正義の終に富貴となりて顯はれたるものである。

神は豫め定めたる所の者は之を召き、召きたる者は之を義とし、義としたる者は之に榮を賜へり（羅馬書八章三十節）。

是れが完全なる救濟である、其始めと終りとである、義とせられたる者が榮を賜はりて救濟は完全うせらるゝのである、我等は神を裁判人とのみ見てはならない、彼は愛なる父である、全能の神である、言へば爲し給ふ神である、義を宣告して止み給ふ者ではない、其宣告を事實にし給ふ者である、然り、事實にし給はざる事は之を宣告し給はない者である、故にパウロは言ふた、

汝等の中に善業を始め給ひし者、之を主イエスキリストの日までに全うすべしと

我れ深く信ず

と（腓立比書一章六節）、神の宣告は實現の證明である、彼は完全に義とせんと欲し給ふまでは義を宣告し給はない、**ヱホバは誓を立て其聖意を變へさせ給ふことなし**と云ふ（詩篇百十篇四節）、我等一たび彼の赦免の聲を耳にしたらんか、我等の救濟は確實である、人は我等に就て何んと言ふとも、神は我等を人と天使との前に義人として立てしめ給ふまでは其聖き業を止め給はない。

誰の功績か

○余が神のために何にか善き仕事を爲して居るから、其れがために神は余を活かし

て置き給ふのではない、神が余を愛し給ふが故に、彼は余をして存へしめ給ふのである、余の從事する事業の報酬を以ててはない、神の恩惠に由て余は存在する者である、余の事業は余に取りては道樂に過ぎない、余は余の事業に由て生活する者ではない。

○余の功績か、キリストの功績か、信仰上の大問題は是れである、所謂新神學とは余の功績を重んずる者であつて、舊神學とはキリストの功績を重んずる者である、余は余の救濟を全うすべき者である乎、又は余の救濟は已にキリストに由つて全うせられた者である乎、二者孰れが眞なる乎、是れが新舊兩思想の分れる所である、普通の倫理學上の觀念より見れば前者が眞らしくある、然し聖書の示す所に由れば眞理は後者に在るが如くに見える、倫理か福音か、問題は終に茲に歸着するのである。

○爾うして余自身は福音信者である、余はキリストの功績を信ずる者である、神が余を惠み給ふのはイエスのために(for Jesus' sake)惠み給ふのである、余はコロムウエルと同く「毫釐をも稼ぎ得ざる者」である、余はキリストが余に代りて成し就げ給ひし善行に由て救はれるのである、余が大膽にも多くの余不相應の要求を以て神に近づき得るは全くこれが爲である、如何に慈悲深き神なればとて余は余のために余を惠み給へと言ひて彼に近づくことは出來ない、然しながらキリストのために余を惠み給へと言ふのであるならば、余の如き者と雖も大膽にアバ父よと叫びながら神の寶座に向つて進み行くことが出來る、余は余のために何物をも要求する資格を有たない、併しながらキリストのためとならば萬事を父に向て要求することが出來る、自身では何一つ有たざる者、然れどもキリストに在りては萬物を保有する物である(哥林多後書六章十節)。

○余の此信仰を全然否認するが如くに見ゆる聖書の言葉は腓立比書二章十二節である、パウロは其所に於て言ふて居る、

汝等畏懼戰慄て己が救を全うせよ

と、然れば余の救は余が全うすべき者ではあるまい乎。

○併しパウロの此言葉は爾う云ふ事を我等に敎ゆるのではない、先づ第一に玆に「己が」とあるのは是れは神に對して云ふたのではなくして、パウロに對して云ふたのである事はその後を讀んで判かる、彼は玆にピリピに於ける彼の信徒が彼等の師父なる彼れパウロに賴ることなく、彼が彼等と偕に居らざる時と雖も獨り自から己が救を全うせよと言ひ贈つたのである、即ち汝等自から神にのみ賴ることなくして、己が救を全うせよと言ふたのではなくして、汝等我れパウロに依ることなくして、各自己が救を全うせよと言ふたのである。

○其次ぎは「全うせよ」との辭である、是れは決して原語の完全なる譯語ではないが、然かし「獲得」の意でない事は明かである、パウロはピリピ人に向つて「汝等勉めて己が救を獲得せよ」とは言はない、救は神の賜物である、是れ人が自から獲んと欲して獲られる者ではない、然かし人は神より賜はりし救を或る意味に於ては全うすることが出來る、即ち聖靈の恩化を妨ぐることなくして、神が要め給ふ完全に己を達せしむることが出來る、其事は疑ふべくもない。

○併し「全うせよ」は善き譯語ではない、其原語はパウロ獨特の辭であつて、譯するに甚だ難いものである、故に日本譯聖書に於ても種々の辭を以て譯して居る、或ひは**來らす**とも云ひ（羅馬書四章十五節）、**行ふ**とも云ひ（全七章十五節）、**なす**とも云ひ（哥林多後書十二章十二節）、**至る**とも云ふて居る（全七章十節）、爾うして其眞の意義は內に在るものを外に出すと云ふことである、英譯聖書に之を排立比書の此處に work out と譯してあるのは最も適切であると思ふ、然かし英譯の場合に於ても高調は之を out に置いて讀まなければならない、即ち「畏懼戰慄て汝等の衷なる救を外に働らき出せよ」との意である、爾うして「外に働らき出す」とは「實を結ぶ」と云ふに異ならない、即ち身に於て神の榮光を顯はすと云ふと同じであつて、短い言葉を以て言へば信仰を行爲に顯はせと云ふ事である、爾うして此事たる確かに「救の完成」である、行爲は信仰の仕上げである、人は行爲に由ては救はれないが、然しそれと同時に又行爲を以て外に顯はれない信仰に由ては救はれない、我等若し己が救を全うせんとすれば、キリストが我等のために遂げ給ひし救ひを外に働

らき出さなければならない。

○然し若しピリピ人がパウロに向つて、彼等は如何にして救を全うすべき乎と問ふたならば、彼は此善を爲よ、彼惡を爲す勿れとは答へなかつたであらふ、彼は希伯來書記者のやうに「イエス即ち信仰の先導となりて(信仰を興す者にして)之を成全うする者を望むべし」と答へたであらふ(希伯來書十二章二節)、信仰も救もイエスに由て興されイエスに由て全うされる者である、故に我等は我等の救を全うせよと命ぜられて、益々自己を棄てイエスを望むべきである、我等は信仰に由て救はれるのであるが、併し其信仰までが自己が興すものではなくして神が我等に賜ふ物である(以弗所書二章八節)。

○余の信仰の立場を明かにするために余が聖書の此一節に就て斯くまで力を籠めて論究するのを見て、讀者の或者は無益の談議なりと言ひて訝るであらふが、決して爾うではない、此腓立比書二章十二節のために心を惱ました者は今日まで幾人あつたか知れない、是は如何にもユニテリヤン主義を主張する言葉のやうに見える、之

を淺く解してパウロの說きし恩惠の福音は其土臺から崩れて仕舞うやうに見える、故に腓立比書の註解者は力を籠めて此一節を說明して居る、米國の聖書學者として有名なる故H・C・ツラムブル氏の如きは特に一篇の論文を公にして、此一節の福音的意義を明瞭にせんとした、余の玆に述べたる解釋の如きも大に氏の見解に負ふ所がある。

○洵にキリストは我等の救の始めであつて、又其終りである、基督者の生涯はキリストである、其義も、信仰も、行爲も、功績もすべて基督である、余が今日まで幾回となく引用した言葉であるが、基督者の生涯はパウロの左の一言にて盡きて居るのである、

我れキリストと偕に十字架に釘けられたり、もはや、我れ生けるにあらず、キリスト我に在りて生けるなり、今我れ肉體にありて生けるは我を愛して我がために己を捨てし者、即ち神の子を信ずるに由て生けるなり(加拉太書二章二十節)。

豫言に關する研究

天然詩人としての預言者エレミヤ

引照はすべて耶利米亞記よりす、本文はドライバー博士の英譯に依る。

預言者は詩人であり、詩人は預言者である、二者の間の區別を立てることは甚だ難い、預言者は神の旨を傳ふる者であつて、詩人は天然の心を語る者であると言ふても二者の間の區別は立たない、何故となれば神の旨を解せざれば天然の心は解らず、天然を解せざれば神の旨は解らないからである、故にすべての預言者は能く天然を解し、すべての詩人は能く神の旨を知る、預言者も詩人も均しく直に神より遣られたる者であつて、人よりに非ず又人に由らず、直に神に由て立てられたる者である、若し强いて兩者の間に區別を立てんとするならば余輩は預言者は昔の詩人、詩人は今の預言者と謂ふのが最も適切であると思ふ、二者は同階級の人である、儀禮に重

きを置く儀式家、文字を爭ふ神學者の正反對に立つ者であつて、活きたる神に最も近く立つ者である。

而して預言者の中でもエレミヤは殊に詩人的である、彼の濃かなる婦人の如き情緒は自づと麗はしき詩の言辭を以て現はれた、彼の預言に組織立つたる所は無い、彼の言辭は喊聲にあらざれば嘆句である、哀歌にあらざれば短詩である、心情其儘の噴出であつて、其秀美なるは主として其點に在る。

嗚呼、我腸よ我腸よ、我は痛む、
我が胸板よ、我が心は我が衷に悲む、
我は默する能はず、
我は喇叭の聲、戰爭の喊を聞けばなり。

* * * * * *

我れ地を見しに形なく又虛しかりき、
天を見しに光なかりき、

山を見しに皆な震ひたり、
すべての丘は動搖ぎたり、
我れ視しに人は絶えたり、
空の鳥はすべて飛去れり、
田園は曠野と化せり、
すべての邑はヱホバの前に壞れたり、
其激しき怒の前に壞れたり。（四章十九節以下）

是れ其一例に過ぎない、而かも能くヱレミヤの文體を代表する者である、文字に彼の熱情が寫りて、彼の血管の脈搏を感ずるが如くに覺ゆる。

然し余輩は今茲に彼の預言全體に就て語らんと欲するのではない、彼を天然詩人として觀んと欲するのである、誠にヱレミヤは預言者中のウォルヅオスである、彼は天然を感ずること甚だ敏く、隨て彼の思想は善く天然の言辭を以て現はれた、彼は勿論神の預言者であつたから、殊更らに天然を歌はんとは爲なかつた、巴旦杏も、

無果樹も、鶴も、斑鳩も、燕も、雁も、豹も、駱駝も、彼に詩題をば供しなかつた、然しながら彼の國人に神の聖旨を傳ふるに方て、詩人的なる彼は自づと是等の天然物を以て語つた、常に深く天然と親しみ、善く其心を解つた者でなければ斯くも自由に、且つ適切に天然を以て神の情を語ることは出來ない、余輩は耶利米亞記を讀むたび毎に思ふ、若しアナトテの祭司の子なる此青年が神の捕ふる所となりて、預言の職を強いらるゝ事がなかりしならば、彼は第一流の詩人となりて世界の文學を飾つたであらふと。

ヱレミヤは彼が蒙りし最初の默示に天然物を以て接した、彼れ預言職に就きてよりまだ間もなく、一日郊外に出て、春まだ寒きに巴旦杏の樹の其梢に白葩を噴出するを見てありしに、ヱホバの言は彼に臨みて曰ふた

ヱレミヤよ、汝、何を見るや

と、彼は答へて曰ふた

我れ巴旦杏の枝を見る

と、時にエホバ彼に言給ひけるは

汝、善く見たり、そは我れ我言を爲さんとて醒むればなり

と（一章十一、十二節）、巴旦杏、ヘブル語にて shaked と謂ふ、「醒むる」の意である、我國の梅に似て春の魁として冬の眞中に其花を開くが故に斯く稱せらる、而して醒むる樹の花咲くを見て預言者の心に直に浮びしは醒むる神の存在である、今や不義は横行し、正義は眠り、神も亦眠り給ひしかの如くに思はれて、預言者の信仰は將さに消えなんとした、然れども目を擧げて看よ巴旦杏の枝を、醒むる樹の梢の白團々たるを、天地は未だ全く眠らず、エホバは世と共に眠り給はざるなり、

視よ、イスラエルを守り給ふ者は微睡むことなし、又寢ることもなし（詩篇百二十一篇四節）

醒むる樹、寢らざる神と、預言者は巴旦杏を見てエホバを聯想した、彼の消えなんとする信仰は百花の魁なる此花を見て復活した、神は巴旦杏を以て預言者に語り給ふた、エレミヤはシャケド（醒むる樹）に由てシャコド（醒むる者）の心を識つた、玆に天然物は預言的に解釋されて、神の言は之に由て預言者に臨んだ。

惟りパレスチナの巴旦杏に限らない、我國の梅の花とても同じである、梅は春の魁であつて又復興の預言である、梅の咲く所に寢らざる神は在し給ふ、霜雪地を閉ぢて萬籟聲を潛め、世は蕭條の冬と化して、革正の希望全く絶えんとする時、梅花の一枝は吾人に公義來復の希望を供すべきである、吾人は梅花の開くを見て不信者の如くに

梅の花春より先きに咲きにけり
見る人稀れに雪は降りつゝ

と歎ずべきではない、預言者エレミヤの心を以て

梅は咲けり、不義の冬は將さに去らんとす、エホバは今より其臂の力を顯はし、
聖國の春を此地に來らし給ふ

と唱ふべきである、今や此國に預言者エレミヤは居らざるも、巴旦杏に似たる梅は在る、吾人は之を見て彼に臨みたると同じ默示を吾人の心に受くべきである。

早咲の巴旦杏に寢らざる神の守護と活動とを識りし預言者は天空翔る鳥に民の心の頑硬にして濟度し難きを見た、彼はイスラエルの民を責めて言ふた、

天空の鶴は其定められたる期を知り、斑鳩と鶴と燕とは其來る時を守る、然れども我民はエホバの律法を知らざるなり

と(八章七節)、玆に其名を列ねられたる鳥はすべて所謂る候鳥である、鶴は鷺に似て夫れよりも稍々大きく、冬は赤道直下、阿弗利加中部にありて、春來ると同時に北の方パレスチナ地方に移轉する鳥である、斑鳩、鶴、燕、亦同じく時期を定めて南北に移動する者である、其移轉の時期を誤らざるを目擊せし預言者は之と對照して彼の國民の心の變遷常ならざるを歎ぜざるを得なかつた、鳥の移轉は其本能に因り、人の變心は其意志に因ると言ふと雖も、人にも亦道義的本能と稱すべき者があつて、彼が神

と其定め給ひし律法を知るは重もに此本能に因るのである、若し人にして神を離れざらん乎、彼は意力を以て努むることなくして、彼の本能の欲する所に循て人たるの本分を盡し得るのである、即ち鳥が本能に由て還るべき時を知り、往くべき道を知るが如くに、人も亦天賦の本能に由て彼を造りし神を知り又之に到るべき途を知るのである、人に神を知る本能が無いのではない、彼は罪に由て之を失つたのである、此點に於て人は確かに鳥や獸に劣て居る、視よ、本能の力の如何に偉大なるを、西比利亞の曠野、北氷洋の岸、短かき夏の光に高く茂る葦の中に孵化されし水鳥は秋至れば其發生の地を去りて、亞爾泰、喜馬拉の嶮を越えて遠く印度の叢林に移り、玆に三冬の寒を避け、春至れば又北へ北へと復たび其發生の地に還るにあらずや、彼等を大空の中に導くに羅針盤あるに非ず、彼等に危險の所在を示す空中案内あるに非ず、而かも神は本能を以て彼等を導き、彼等をして年に二回、地球の周圍四分の一に渉る長途の旅行を爲さしめ給ふに非ずや、鳥類の移轉は博物學者も未だ解し得ざる天然の秘密である、本能は道理以上、意志以上の力である、之を失ふは大な

る損失である、之を保存し、又回復するは大なる利益である、而して鶴と斑鳩と鶴と燕とは之を失はない、然しイスラエルの民は之を失ふた、預言者は此事を思ふて長大息せざるを得なかつた。

日本にも亦鶴(Ciconia boyciana)がある、鳩の類には斑鳩、雉鳩、紅鳩、金鳩、絲鳩等がある、鶴には眞那鶴、鍋鶴、黑鶴等がある、燕には普通の燕の外に、琉球燕、腰赤燕、しやうどう燕等がある、何れも候鳥であつて、時期を定めて此地に來り、時期を定めて此地を去る者である、彼等は今も猶ほ其往來の時を忘れない、燕は必ず其生れし巢に還歸し、其、曾て受けし主人の恩を忘れず、秋來れば宇宙何處となく飛去ると雖も、春來れば必ず復た舊の古巢に歸り來る、然れども人は如何、基督教徒と稱する者は如何、彼等は燕に優さる所あるか、彼等來る時に何ぞ慇懃なる、彼等去る時に何ぞ亂暴なる、彼等は去て遠く北洋に往きしにあらず、而かも主家の恩は既に忘却して其門前を過ぐるも敢て之を訪はんとしない、而して人なる主人に對して斯くも浮薄なる彼等は主なる神に對しては更らに不虔を極め、神を信ずると

稱するも實は彼を利用するに過ぎない、彼等は實に燕に劣り、鳩に劣り、鷺に劣る、彼等は人なるが故に少しも貴くない、預言者イザヤは彼等如き者に就て言ふた、

牛は其主を知り、驢馬は其主人の厩を知る、然れどイスラエルは知らず、我民は覺らざるなり

と(以賽亞書一章三節)。

天然は善きをも示し亦惡しきをも示す、天然は實物を以てする善惡の解說である、鷺は白きを示し、鴉は黑きを示す、羊は優しきを示し、虎は猛きを示す、鳩の如く柔順く、蛇の如く智くあれとはキリストの教訓である、而して性來の天然詩人たりし預言者は能く天然の此兩面を解した。

鶴と鳩と燕とは善く其時を守るに由て智慧を示し、鷓鴣は無益の業に從事するに由て愚を示す、イスラエルの民は燕に劣る、而して世には又鷓鴣に似る者あり、其人は誰か、預言者は曰く

鷓鴣の己れの生まざる卵を抱くが如く、義に由らずして財を獲る者あり、其人は命の半ばにして之を離れ、其終りに愚かなる者と成るべし

と（十七章十一節）、事實然るか否やは知らず、然れども鷓鴣の牝鷄は他の鳥の卵を集め、之を翼の下に覆ひて己が雛を得んとするも、其己が生みたる卵にあらざるが故に孵化せし雛は飛去て跡なく、彼女の勞は無益に終るとは昔時の民の一般に信ぜし所である、此事を疑はざりし預言者は不義の富者を愚なる鷓鴣の牝鷄に譬へて曰ふた

正道に由らずして產を作りし人は鷓鴣の如し、其產は彼の生命半ばにして翼を生して飛去り、彼は生涯の終りに於て大なる馬鹿を見るべし

と、滑稽を混へたる詰責の言辭である、而かも不義の富者を評し得て餘りある言辭である、己が生まざる卵は己が子でない、之を孵化するは全く無益の勞である、義に由て作らざる產は己が產ではない、いくら骨を折て之を培養すればとてその長く己が身に附き居る筈はない、惡錢身に附かず、不義の產羽翼を生じて飛去る、政權

を利用し、愚民を欺き、百千萬の富を作りたればとて其富は竊みし富であつて正當に己れに屬けるものではない、鷓鴣に鑑みよ、鷓鴣の愚を學ぶ勿れ、世の蓄財に餘念なき者よと、預言者エレミヤは言ふたのである。

鳥を以て責め、鳥を以て諭せし預言者は又獸を以て說き獸を以て敎へた、罪に沈める民は天空を飛ぶ鳥に譬ふべくよりは寧ろ地を匍ふ獸に較ぶべきである、イスラエルの民を何にか譬へん、預言者は曰く

彼等は此處其處と走廻る若かき牝駱駝なり、
彼等は又曠野に慣れたる野の牝驢馬なり、
其慾に驅られて風に喘ぐ、
其慾の動く時に誰か之を制し得んや

と（二章廿三、廿四節）、是れ詩歌の境を脫して激越の言である、而かも道理の境を脫して肉慾の要求是れ道とする民に對しては最も適切なる言である、詩は必しも麗

詞ではない、時に耻の裸體を發くも亦詩人の天職である。

漢語に豹變の熟語がある、善に遷るの義であつて、豹の皮毛の變更して文をなすこと彬蔚たるが如きことを云ふなりとある、故に易經に「君子は豹變し、小人は面を革む」とある、然しながらエレミヤの觀たる豹は全く之と異なる、彼の觀たる豹は變らざる豹である、其黑き闇き斑文は終生其皮毛に存し、除かんと欲して除く能はず、洗はんと欲して洗ふ能はず、玆に於てか有名なる彼の「豹の斑駁」の比喩が出たのである、

エテオピヤ人其皮膚を變へ得るか、
豹、其斑駁を更へ得るか、
若し之を爲し得ば惡に慣れたる汝等も善を爲し得べし

と（十三章廿三節）エテオピヤ人は性來の黑人である、彼等は如何に望むとも其黑檀色の皮膚を變じて雪の肌とな　ことは出來ない、豹の斑駁は性來の汚點である、

是れ洗ふも磨くも除くことの出來ない者である、其如く罪に生れ、其中に成育ちたる人の罪は性來の罪である、之を除かんとするはエテオピヤ人が其皮膚を變へんとするが如く、豹が其斑駁を除かんとするが如くに難くある、是れ到底人力を以て爲すことの出來る事でない、預言者が他の所にて曰ひしが如く

人の心は萬物よりも僞はる者なり、是れ改善の希望なきまでに惡し（十七章九節）、

黑人の皮膚と豹の斑駁、之に加ふるに人の心、世に變らざる者は是れである、道德は說かるゝも、政治は改めらるゝも、美術と學術とは如何に進歩するとも、變らざる者は人の心である、是れ絕望的に惡しき者、之を改むるの力は人より出づるに非ずして神より來らなければならない、故に此絕望の言を發せし預言者は後に改更の希望を述べて曰ふた、

エホバ曰ひ給ふ、
視よ、時は到らんとす、
我れイスラエルの家とユダの家とに新たに契約を立てんとす、

是れ我が曾て彼等の先祖の手を取りてエヂプトの國より彼等を導き出せし時に彼等に立てし契約に循る者に非ず、

此契約は彼等之を破りたり、我れ彼等に對して善き夫たりしに關はらずとエホバ曰ひ給ふ、

然れども我が後の日にイスラエルの家に立てん所の契約は是なるべしとエホバ曰ひ給ふ、卽ち

我れ彼等の衷に我律法を置くべし、
我れ是を彼等の心の上に記すべし、

我は彼等の神となるべし、彼等は又我民となるべし、

彼等は復たび各人其隣人に告げ、又各人其兄弟に告げて「汝、エホバを識れ」と言はざるべし、

そは小なる者より大なるものに至るまで悉く我を識るべければなりとエホバ曰ひ給ふ、

そは我れ彼等の不義を赦し、其罪を復たび思出さゞればなり。（三十一章卅一—卅四節）

エテオピヤ人の皮膚も終には雪の如く白くなるべし、豹の斑駁も終に除かれて汚なき穢れなき羊の如くなるべし、而して罪に慣れたる人の心も、意志の力に由るに非ず、教師の訓誡に由るに非ず、神の無限の恩惠に由て聖き全き者となるべしと、預言者は責むるばかりではない、又慰む、傷けるばかりではない、又癒す、豹の斑駁を以て始め、天使の衣を以て終る、預言者は畢竟するに訓慰師である。

エレミヤの詩人的觀察は草木禽獸の生物に止まらない、山川礦石の無生物に及んだ、而かも彼は小にして手近かなるを擇らんで大にして宏遠なるを避けた、大瀑を歌はずして小泉を讃へた、岩石に比べずして寶玉に喩へた、詩人としてエレミヤの秀美なるは其引用物のすべて素樸なるに在る、彼が國人の罪科を天に訴へたる言辭に左の如き者がある、

天よ、此事に駭け、

甚く慄けよとエホバ曰ひ給ふ、
我民は二つの惡事を爲せり、
彼等は活ける水の泉なる我を棄て、
己がために水溜を掘れり、
水を保たざる壞れたる水溜を掘れり。(二章十二、十三節)

「活ける水の泉」とは滾々として湧出て涸るゝことなき天然の泉である、之に對して水溜は人の作りし者であつて、其量は少なく、其供給に限りがある、天然の泉と人爲の水溜、神と政府又は教會、前者は無限であつて後者は有限である、前者は常に新鮮であつて、後者は常に腐敗して居る、而かも人は好んで神を去つて官吏と教役者に寄る、水を保たざる壞れたる水溜なる政府と教會に依る。

金剛石は石の中で最も堅い者である、之を以て岩の面をも容易に彫ることが出來る、此事を知りたる預言者はユダの罪を述べて曰ふた、

ユダの罪は鐵のペンを以て書かる、

金剛石の尖を以て記さる、
彼等の心の石碑の上に刻まる、
彼等の祭壇の隅に鐫けらる、

と(十七章一節)、ユダの罪は鐵のペン、金剛石の尖を以て其心の石碑の上に刻まると云ふ、實に强い言葉である、善く金剛石の堅さと人の心の頑硬なるとを識る者にあらざれば此言を發し得ない。

* * * * * *

此他耶利米亞記全篇を通うして之に類したる言は少なくない、余輩は此書を讀む毎に英國詩人ジョン・ゲイの有名の作なる『牧者と哲學者』の中の左の一句を想出さゞるを得ない、

天然の法則を探り、
其眞理より訓誡を引かん乎、
人は學問に依ることなくして、

能く賢且つ善且つ智なるを得べし。

僞預言者とは何ぞや

聖書に僞預言者又は僞の預言者と云ふものがある、「僞の預言者を謹めよ」(馬太傳七章十五節)、又「僞預言者多く起りて多くの人を欺かん」(仝廿四章十一節)、「僞りの預言者バリエス……此人は國の方伯セルギス・パウロといふ智者と偕にあり」(行傳十三章六、七節)、「昔し民の中に僞はりの預言者ありき、其如く汝等の中にも僞はりの師いでん」(彼得後書二章一節)、「多くの僞預言者出て世に入れり」(約翰第壹書四章一節)、以上は新約聖書に於てゞある、舊約聖書には僞預言者なる辭はない、然し「謊言を述ぶる預言者」(以賽亞書九章十五節)、「虛誕の默示と卜筮と虛しきこと

と己の心の詐とを汝等に預言する者」(耶利米亞記十四章十四節)等の辭がある、勿論、僞預言者といふと同じである、只舊約に於ては新約に於けるが如くpseudopro-pletes と云ふ此類の預言者を呼稱するための一箇の言辭がなかつたまでゞある。

抑々僞預言者とは何んである乎、是れ單に惡むべき者、蔑視むべき者、賣僧、僞善者、羊の皮を被りたる狼等と稱し一目して其僞物たるを知ることを得る者であつた乎、言を換へて曰へば僞預言者とは必ずしも惡人であつた乎、惡を企圖み、惡を行ふを以て其日を送りし佞奸邪智の者であつた乎、僞預言者の名其物が斯かる者として彼等を吾人に紹介する、吾人は其名を聞いてさへ其面に唾したく思ふ。

然しながら聖書は斯かる者として僞預言者を吾人に傳へない、僞預言者とは其當時僞預言者と認められた者ではない、隨て其當時世に嫌はれ、其紳士淑女の避くる所となつた者ではない、否な、夫れとは正反對である、僞預言者とは眞預言者に對して爾う稱はれた者であつて、彼等は眞の預言者より見て僞はりの預言者であつたのである、彼等は世が見て以て僞預言者と做した者ではない、イザヤ、エレミヤ、エ

ゼキエル、アモス、ホゼヤ等極めて少數の人が見て以て偽預言者と做した者である、人の眞偽を判別することの難いのは今も昔も同じ事である、爾うして偽預言者と眞預言者とは何人にも判別ることの出來た者ではない、眞理を知る者のみ能く虚偽を識る、眞預言者のみ能く偽預言者を判別ることが出來た、偽預言者とは勿論偽りの世が見て以て爾か稱んだ者ではない、神の人が見て以て爾か名づけた者である。

然らば偽預言者とは何んであつた乎と云ふに、彼等は先づ第一に當時の所謂愛國者であつた、即ち國の利益を思ひ、國威宣揚を唱へ、一向に其富强安寧幸福を願つた者であつた、故に彼等は進んで政治に携はり、他强國との同盟を說き、自國の惡事と云へば只管之を掩はんとし、之を金甌無缺の國として世界に紹介し、以て其稱讃同情を博せんとした、即ち、偽預言者とは何物よりも先づ第一に自己の國を愛した者である、正義よりも、公道よりも、然り、エホバの神よりも、ユダ國又はイスラエル國を愛した者である、彼等は國王の頌德者、國民の讃美者であつた、宗教も之を國のために利用し、之を以て國を建てんと欲した者である。

然るにイザヤ、エレミヤ、エゼキエル、アモス、ホゼヤ、ザカリヤ等の預言者は之とは全く正反對の態度を取つた、彼等は勿論國を愛した、然れども國よりも神と正義とを愛した、彼等は神の人でありしが故に國に責むべき事があれば之を責むるに少しも躊躇しなかつた、國人の名望なるものは彼等は少しも之を眼中に置かなかつた、神の正義、神の名譽、是れが彼等の熱心を喚起せし唯一の原動力であつた、預言者ミカは曰ふた、

我はエホバの聖靈に由りて能力身に滿ち、公義と勇氣、衷に滿つれば、ヤコブ（ユダ國）に其愆を示し、イスラエル（國）に其罪を示すことを得、

と（米迦書三章八節）、「國に其愆と罪とを示すことを得」と、是れ偽預言者の爲し得なかつた所である、必しも國人の反對を懼れてゞはない、彼等が國を愛する餘りに切なるより、情に於て爲さんと欲して爲し得なかつた所である、然るに眞の預言者はエホバの聖靈に由りて此情に打勝つことが出來た、故に大膽に、臆せず、國に其愆を示し、民に其罪を示すことが出來た。

僞預言者の何たる乎を知らんと欲すれば之を眞預言者と相對して見るに若くはない、眞預言者の顯はれたる時に必ず僞預言者が顯はれた、一つは他を離れては顯はれなかつた、預言者ミカヤに對して僞預言者ケナアナの子ゼデキヤがあつた（列王紀略上廿二章廿四、廿五節）、預言者アモスに對して僞預言者ベテルの祭司アマジヤがあつた（亞麼士書七章十—十七節）、預言者エレミヤに對してギベオンのアズルの子なる僞預言者ハナニヤがあつた（耶利米亞記廿八章）、又ネヘラミ人シマヤがあつた（仝廿九章廿四節以下）、其他、名は記してはないが、イザヤに對しても、エゼキエルに對しても、又其他の預言者に對しても僞預言者のあつたことは確かである（以西結書十三章、撒迦利亞書十三章二節等を見よ）、爾うして是等の對照に由て吾人は眞預言者と僞預言者とを明白に分つことが出來る。

今ミカヤ對ゼデキヤの例に就て見るに、イスラエルの王アハブ、ギレアデのラモテを略取せんとするに方り、其預言者四百人許りを集めて「我れギレアデのラモテに戰ひに往くべきや又は罷むべきや」と問ひしに、彼等僞りの預言者等は王の意に逆

らはんことを恐れ、且つ國威宣揚を欲ひければ異口同音に「王よ攻め上り給へ、主エホバ必ず之を王の手に付し給ふべし」と答へた、然るにアハブ王、同事をイムラの子ミカヤに問ひけるに彼は臆せず王に答へて曰ふた、「エホバ汝に就て災禍あらんことを言ひ給へり」と、斯くも憚からず善事を預言せず唯惡事のみを預言せしが故に王はミカヤを惡みたりとある、ケナアナの子ゼデキヤは王に善事を預言せし四百人の預言者（僞）の一人であつたらふ、王はミカヤが「エホバ虛言を云ふ靈を此のすべての預言者等の口に入れ給へり」と曰ひしを聞き、怒つてミカヤの頰を批しと云ふ、此場合に於てはゼデキヤと其同僚とは所謂る忠臣愛國者であつた、彼等は君のためを思ひ、國のためを計りて王の作戰計畫に同意し、彼を勸めて遠征の途に上らしめんとした、獨りミカヤのみ斯る無謀の計策に反對した、彼はアハブ王の人物を知つた、故に彼のなすことの正義と公道とに合はないことを知つた、預言者ミカヤの欲せしことは他國の攻略では無くして自國の改革であつた、ラモテの王の征服ではなくして、イスラエルの王の悔改であつた、僞預言者は國の膨脹を望んだ、眞

預言者は民の改心を求めた、一つは威を外に張らんと欲した、他の者は衷に聖まらんことを希ふた、僞りの預言者と眞の預言者との別は玆に於て明白である、威か德か、富か聖か、二者の欲ふ所に由て其眞僞は顯はれた、國の富强に目を留めし者、其れが僞預言者であつた、國の神聖に意を注ぎし者、其れが眞預言者であつた（列王紀略上廿二章を見よ）。

同じ事がアモス對アマジヤの場合に就て見ても判明る、アモスはイスラエルの民の罪科を歎き之を誡めて「汝等悔改めざれば其罰としてイサクの崇邱は荒され、イスラエルの聖所は毀たれん、エホバ劍をもてヤラベアムの家に赴かん」と告げた、然るに祭司アマジヤは之を以て不敬の言となし、王ヤラベアムに遣して「イスラエルの家の眞中にてアモス汝に叛けり」と言ふた、即ち、アモスを叛臣なり國賊なりと稱して彼を王に訴へた、彼れアマジヤの目に映ぜしアモスは民を亂す者、王に叛く者、神の聖殿を瀆す者であつた、然れどもアモスの目より見れば、彼に沈默を命じ、彼を王に訴へし祭司アマジヤこそ眞の逆臣國賊であつて僞はりの預言者であつた。

神の聖旨を傳へし者、其れが眞の預言者であつた、王の意を迎へし者、其れが僞はりの預言者であつた、後者必ずしも惡人ではなかつた、彼れ或ひは恭順の人、溫厚篤實の士であつたであらう、然れども彼はペテロの如くに**神の事を思はず人の事を思ひたれば**、眞の預言者の目より視て僞はりの預言者であつたのである（馬太傳十六章廿三節）。

當時の愛國者であつた僞りの預言者は又武力の賞讃者、同盟の贊成家であつた、彼等は神の國を此世に建つるに方て人の力を藉るの必要を信じた、彼等は純正の義には餘り重きを置かなかつた、彼等は武を以てユダとイスラエルの神聖を維持せんとした、又時には他の强國と同盟を結んで自國の利益を計らんとした、故に彼等の或る者はヘゼキヤ王に勸めて埃及國と結ばしめた、又彼等の或る者はエホイアキム王に勸めて欵をバビロン國に送らしめた、彼等は即ち國運發展の方法として普通の政略を講ずるに躊躇しなかつた、彼等は神を信ずると同時に又劍の力を信じた、彼等は信仰と劍と政略とを以て彼等の國を維持し神の國を此地に來さんとした。

然るに眞の預言者は斯かる複雜なる且つ矛盾せる方法には全然反對した、彼等は十誡第一條を文字通りに信じた、**汝我面の前に我の外何物をも神とすべからず**と、即ち唯一神教の精神を其儘に實行せんとした、ヱホバに依恃む者はヱホバの外何物にも依恃むべからずと、是れ彼等が嚴然として採て動かざる主張であつた、彼等の或者は謠ふて曰ふた、

或者は戎車に恃み、或者は騎馬に恃む、然れど我等は我がヱホバの名を唱へん

と（詩篇廿二篇七節）、是れ軍備排斥の聲である、信仰を以て兵馬に代へんとする語である、又預言者イザヤは當時の同盟論者に反對して曰ふた、

援助を得んとてエジプトに下り、馬に依賴む者は禍なるかな、戎車多きが故に之に恃み騎兵甚だ强きが故に之を恃む、然れどイスラエルの聖者を仰がずヱホバを求むることをせざるなり

と（以賽亞書卅一章一節）、預言者ホゼヤも亦同じ事を曰ふた、

アッスリヤは我等を援けず、我等は馬に乘らじ

と（何西阿書十四章三節）、爾うして武力と外交とを全然排斥せし眞の預言者はヱホバに依恃むることを以て國政唯一の方法となした、

汝等靜かにせば救ひを得、平穩にして依賴まば力を得べし

と（以賽亞書三十章十五節）、戎車に恃まず、騎馬に賴まず、外交に恃まず、同盟に恃まず、唯靜かにヱホバの神に恃まば國を救ふを得べく、勢力を得べしとのことであつた、爾うして神の選民の歷史に於て事實は常にその通りであつた、ギデオンがミデアン人を敗つたのも、ヘゼキヤ王がアッスリヤ軍を退かしたのも、ユダとイスラエルの聯合軍がモアブの軍を滅したのも皆な此方法に由てゞあつた、神の選民に劍を拔いて戰ふの必要はない、異邦に援助を乞ふの必要はない、唯祈つて恃めば足るとは是れ眞正の預言者の堅き信仰であつた、即ち彼等はキリスト以前の平和主義者、基督教以前の非戰論者であつた、彼等は個人の行爲よりのみならず、亦國家の政治よりも腕力と政略とを放逐せんとした。

茲に於てか僞りの預言者と眞正の預言者との間に斷えざる衝突があつた、一は他の

者を罵りて偽りの預言者といふた、兩者の相違は必しも人物、人成の相違ではなかつた、信仰、主義、方針の相違であつた、所謂「偽預言者」の中にも誠實なる愛國者があつたであらふ、又、後世の人が眞正の預言者と稱する者の中にもエリヤの如き粗野の人、ヨナの如き薄志弱行の人、エレミヤの如き感情激變の人もあつた、兩者同じく國を思つたのであらふ、然れども偽はりの預言者は所謂「謊りの預言」を爲したのである、即ち唯一神教の主義に由らずして、神以外の或る他の勢力に由て國を救ひ民を濟はんとしたのである、其精神や必しも咎むべきでない、唯眞正の預言者の懷きし嚴密なる唯一神教の立場から見て、其方法と政略とが全く誤つて居つたのである。

茲に於て眞の預言者と偽りの預言者との別が判然するのである、神の外何物にも賴らざりし者、是れが眞の預言者である、神に賴るの外、亦此世の勢力にも賴らんとせし者、是れが偽りの預言者である、預言者の「眞」と「偽」とを兩者の品性又は人格に由て定めてはならない、其取りし主義方針に由て定むべきである。

* * * * *

偽りの預言者、偽の監督、偽の宣教師、偽の牧師、彼等は如何なる者であらふ乎、キリストの福音を宣ぶると同時に軍備擴張の必要を唱へ、神の僕なりと稱しながら政權の保護を仰ぎ、此世に友人多きを以て誇り、社交を圓滑にして福音の傳播を計らんとし、此世に在りては此世の方法に由らざるべからずと稱して此世のすべての方法に由て神の國を此世に建設せんとす、其精神や咎むべきにはあらざるべし、又斯かる方法を取る者を稱して悉く惡人なり、偽善者なり、諂媚者なりと云ふことを得ざるべし、然れども、それに關はらず彼等は偽りの預言者の類である、善人ならんも「謊りて」福音を說く者である、キリストの福音の精神は彼等の取る主義精神とは其根本を異にする、人は善意を懷けばとて偽善者たるを免かれない、世には自からを欺く人がある、爾うして昔時の偽りの預言者の多くは斯かる人であつたのである、即ち自己の善良を信ずるの餘り、謊はりて神の聖旨を傳へし者である。

永生に關する研究

靈魂實在の眞義

"The correlation of forces exhibits Mind as in nowise a product of Matter, but as something in its growth and manifestations outside and parallel. It is incompatible with the theory that the relation of the human soul to the body is like that of music to the harp; but it is quite compatible with the time-honoured theory of the human soul as indwelling in the body and escaping from it at death." — JOHN FISKE, *Through Nature to God, p. 156.*

靈魂は直に神より出で來つた者である、肉體の生命が進化して成つた者ではない、靈魂は肉體に屬する者ではない、之に宿る者である、靈魂と肉體とは全く別物である。

意志の自由とは靈魂の自由である、思想の獨立とは靈魂の獨立である、靈魂が若し肉體に屬する者であるならば之に自由も獨立もありやう筈はない、肉體は此地に繫

がる者であつて、束縛は其特有性である、此地に全く關係の無い者があつて、始めて眞正の自由と獨立とがあるのである、我等が自由を慕ひ獨立を愛する事が我等に靈魂の在る何よりも確かなる證據である。

自我とは何である乎、固有の靈魂である、地にも國にも親にも兄弟にも何の關係もない靈魂である、是れは血肉に由て生れた者ではない、是れは神の像に象られて直に神に造られたる者である、故に之は神を父と呼び、神とのみ直接の關係を有つ者である、詩人は言ふた、

あゝ神よ、鹿の溪水を慕ひ喘ぐが如く我が靈魂も汝を慕ひ喘ぐなり

と（詩篇第四十二篇一節）、又智者は言ふた、

塵は元の如くに土に還り、靈魂は之を賦けし神に還るべし

と（傳道之書十二章七節）、神は特別に靈魂の父である、故に彼を「靈魂の父」と稱し奉る（希伯來書十二章九節）、彼は勿論萬物の造主であるから或意味から言へば萬物の父である、併し彼が直接に造り（生み）給ひしものは人の靈魂である、故に人が

其子に對する愛を以て神は人の靈魂を愛し給ふ、人の肉體は多分下等動物より徐々と進化し來つた者であらふ、乍然、其靈魂は直に神より出て來つた者である。

故に靈魂はすべて平等である、之に貴族平民の別はない、之に親子、兄弟、夫婦、君臣の差別はない、すべての靈魂は神の子であつて神に在りて兄弟姉妹である、靈魂の實在を認めずして律法の公平と尊嚴とは解らない、律法は人と人との關係を示すものである、即ち靈魂と靈魂との關係を示す者である、社會の階級なるものは肉體の階級であつて靈魂の階級ではない、神と律法の前に立ては王侯も乞食と何の異なる所はない。

個人とは個々の靈魂である、之を英語で individual と云ふ、分つべからざる者の意である、恰かも理化學で分子のことを atom と云ふと同じである、分子即ちアトムは是れ以上分つべからざる者である、其如く個人も靈的實在物として是れ以上に分つべからざる者である、人類は之を人種に分つことが出來る、人種は之を國民に分つことが出來る、國民は之を階級に分つことが出來る、階級は之を家族に分つことが出來る、爾うして家族は之を個人に分つことが出來る、併しながら分離は之を個人以下に及ぼすことは出來ない、個人は分つべからざる者である、個人は人其儘である、神の子、永久の存在者、自由、獨立、不滅の固有性を有し、全世界を代價に拂ふても購ふことの出來ない程、貴い者である。

靈魂は自由である、獨立である、故に之は人の作つた法則を以て縛ることの出來る者ではない、之は劍を以て斷つことは出來ない、威を以て壓することは出來ない、若し靈魂にして自己の威嚴を覺り、奮然として之を維持するならば世に靈魂ほど不動不拔の者はない。

併しながら威嚴ある靈魂は亦愛する者である、彼は壓制を排斥する、併しながら自から進んで他を愛する、彼は自己を愛する者を愛するのみならず、亦時には自己を憎む者をも愛する、愛は靈魂の特性であつて又其特權である、父なき、母なき、兄弟なき、夫なき、妻なき、君なき、臣なき靈魂は自から進んてすべての人を父母とし、兄弟とし、夫婦とすることが出來る、愛を以て自由獨立の靈魂は四海を眞の兄

弟となし、自己を萬人の僕となすことが出來る、肉體の關係を輕視する靈魂は愛を以て自己を萬人に縛り附け、肉體の關係以上の潔い固い深い國家と社會と家庭とを作る、靈魂は大なる破壞者であると同時に又大なる建設者である、爾うして靈魂の自由意志より出たる愛を以て新たに建設されたる社會、是を天國と稱するのである。爾うして文明の進歩とは何でもない、血骨の關係が段々と減つて來て、靈魂の關係が段々と增して來ることである、最も劣等なる社會は族戚の關係を以てのみ繫がる社會であつて、最も優等なる社會は血肉の關係を全く離れて主義を以て繫がる社會である、靈魂が直に靈魂に繫つて始めて完全なる社會は成るのである、最も高尙なる社會は血緣の絆を以て繫がるゝ社會ではない、愛の鎖を以て結ばるゝ社會である、自由を排斥する者は亡び、之を歡迎する者は興る、靈魂の實在と權能とを無視し、血緣を以て人を拘束せんと欲する者は自から擇んで自他の滅亡を急ぐ者である。

靈魂が愛を以て相結んで成せる社會、是れがキリストの天國である、斯かる社會を建設せんためにキリストは世に降り給ふたのである、人を先づ罪の機關たる肉體の

束縛より救出し、彼に靈魂の自由を供し、以て彼をして愛を以て相繫がる社會を作らしめんために彼は十字架の死をさへ忍び給ふたのである、キリストの目的とせる社會の何たる乎を究めずして、彼の生と死との意味を解することは出來ない。

肉體の產でない靈魂は勿論肉體と共に死する者ではない、人は「我は死す」と云ふ、即ち「我は我が肉體を遺して逝く」と云ふ、人が肉體を客觀するのは彼が肉體以外の者たるの證據である、靈魂の實在を學術的に證明することは出來ない、然し人は何人も死して死せざる者であることを知る、詩人テニソンの言を藉りて言へば

我等は何故なる乎を知らず、
然れども死ぬべく造られざりしを知る、

人が靈魂の消滅を聞て悲み、其不滅を聞いて喜ぶのは是れ彼の不滅の固有性に因るのである、人の何よりも欲んで止まざることは彼の靈魂の不滅の確かめられんことである、爾うして此事さへ確かめらるゝならば、即ち、彼の姓名が、生命の名簿に記さるゝことをさへ確かめらるゝならば、彼はすべての苦痛に別を告げ、流がるゝ

涙を拭ふのである、世には死を恐れないと揚言する人がある、然れども彼等とても不滅を望まないではない、不滅が解らないから恐れないと揚言するのである、死は恐るべき者である、實に「恐怖の王」である、其故は死に苦痛が伴ふからではない、世には死に勝さるの苦痛がある、死の恐るべきは靈魂が其行先を知らず、故に何やら獨り幽暗に入る心地して非常に心細く感ずるからである、下等動物に人間にあるやうな死の恐怖はないに相違ない、人間に在りては死の恐怖は生命の慾求ではない、前途の不安である、人が何よりも死を嫌ふは彼に靈魂の在る確證の一である。

キリスト死を廢し、福音を以て生命と不滅とを明著にせり（提摩太後書一章十節）、キリストの事業は實に是れであつた、彼は政治を革めなかつた、彼は特に慈善事業に從事しなかつた、彼は智識の增進を計らなかつた、彼は此世の人の眼より見て別に是ぞといふ善き事を爲さなかつた、併し彼は人の知らない善事を爲した、最大最上の善事を爲した、彼は死を無きものとした、「恐怖の王」を廢した、爾うして永久の生命と靈魂の不滅とを明著にした、彼の福音とは此大事業を傳ふる者である、靈

魂を無い物と見てキリストの生涯と死とは全く無意味である、若しキリストが靈魂の監督、靈魂の牧者でないならば、彼は殆んど何でもない者である、世にはキリストを最上の教師、最善の慈善家としてのみ見る者がある、然し爾う見てキリストの眞價は決して判明らない、キリストを靈魂の救主と見て、始めて彼の聖さ、貴さ、美はしさが判明るのである。

基督教の來世觀に關する明白なる事實

基督教は明白に來世の存在を教へる、之を教へるのみならず其事實を供する、此點に於て基督教は他の宗教と全く異なる、他の宗教は來世は在るべき筈であると教へる、又は必ず無くてはならないと說く、則ち來世存在に就て揣摩推測を供する、ソク

ラテスの來世觀なるものも是れである、佛教の來世觀なるものも（若し是れありとすれば）是れに過ぎない、則ち來世存在に關する人間の推測と希望とを述べたまでである、其事實に就ては彼等は知る所がなかつた、彼等はその確かに有るといふ證明を供することが出來なかつた。

然かし基督教は僅かに來世の存在を教ゆるに止まらない、基督教は單に來世は無くてはならないとは云はない、基督教は論理を語るよりも寧ろ事實を告げる、若し示すべき事實がなければ論理を語らない、他の事に就ても爾うである、來世存在問題に就ても爾うである。

然らば基督教が示す來世存在の事實とは何んである乎、誰か來世に往いて再び此世に還り來りて、其實在を證明したと云ふのであるか、勿論爾うではない、爾んな人のありやう筈はない、然らば基督教は何に由て來世の實在を吾人に證明するのである乎。

言ふまでもなく、吾人に不朽の生命則ち永生を供してゞある、永生を知らない者は來

世を知らない、永生を受けずして來世を明白に望むことは出來ない、永生とは不死不朽の生命であつて、今始まつて肉體の腐死と共に死せざるものである、永生とは使徒パウロの言を藉りて言へば**靈の質である**（哥林多後書五章五節）、即ち永生の素因たる靈性の前味である、神はキリストに由りて吾等をして斯かる生命を前以て味はしめ給ひて、肉體の死後に更らにより高き生命のあることを吾等に示し給ふのである、此前約なくして、來世の此前兆なくして、吾等はいくら來世の存在を說き聞かさるゝとも之を信ずるとは出來ない、實物を以てする證明の伴はざる約束は約束とはならない、今より實驗するとの出來ない來世は賴るに足らない來世である、いくら聖書が來世の存在を說くも、之を證明するに足る目前の事實がないならば、吾等は如何に之を信ぜんと欲するも信ずることは出來ない、信仰とは勿論眼を以て視、手を以て觸るゝことではない、然しながら信仰とは實驗以外の事を信ずることではない、信仰とは靈の實驗を事實として認むることである、爾うして吾等は吾等が生れながらにして有たない新たなる生命を吾等の中に實驗して永生（來世）の希望を確

實なる智覺の基礎の上に築くのである。

斯くて基督教の供する來世の希望は決して漠然たる賴る所なき希望ではない、基督教は人は何人も生れながらにして不朽の者であるなどゝは云はない、斯く云ふは或ひは「人情的」である乎も知れない、然しながら「人情的」と事實とは全く別物である、何人も不朽なることは望めども、然しながら何人も或る明白なる理由なくして不朽なることは出來ない、天然の法則は無慈悲である、原因が無くして結果はない、**血肉は神の國を嗣ぐこと能はず**、是れ避くべからざる天然の法則である、生れながらの人に永生なし、是れ天然の事實である、基督教は永生を人類の固有性としては說かない、基督教の明白なる教示に從へば永生は神よりの恩賜である、神の大慈に出たる最大の恩賜である。

然らば此永生とは如何にして吾等に臨む乎、基督教は敎へて曰ふ、神の獨子なるイエスキリストを通うしてと、**永生は彼にのみ存す**（He only has immortality）（提摩太前書六章十六節）、是を彼より受けずして受くる所はない、**キリスト死を滅し福音を**

以て生命と壞ざる事とを明かにせり（仝後書一章十節）**汝等我**（キリスト）**に居れ、さらば我また汝等に居らん、枝若し葡萄樹に連ならざれば自ら實を結ぶこと能はず、汝等も我に連ならざれば亦此の如くならん**（約翰傳十五章四節）、生命なくして生命なし、生命のみ能く生命を生ず、是れ生物學の原理である、永生なくして永生なし、永生のみ能く永生を生ず、是れ基督教の敎義である、**イエス曰ひけるは我は復活なり、生命**（永生）**なり、我を信ずる者は死ぬるとも生くべし**（約翰傳十章廿五節）、キリストを信ぜずして、則ち彼に依賴み、彼と心靈的交通を開かずして、吾等に復活もなければ永生もない、キリストを要せざる來世存在は基督教の立場より見れば賴る處なき空想である。

永生を受けずして來世は無い、爾うして永生はキリストに於てのみ存す、故に之をキリストに受けずして吾等は來世を嗣ぐことは出來ない、是れ明白なる基督教の敎示である、此敎示が眞理であるか誤謬である乎は全く別問題である、然しその明白に基督敎の聖書が示す所の敎義であること丈けは公平に此書を研究した人の何人も

否むことの出來ない所である。

靈魂不滅に就て

靈魂不滅は基督敎の根本的敎義であると云ふ、故に基督敎を說く者は必ず先づ神を說くと同時に靈魂不滅を說くを常とする、彼等は思ふ、先づ靈魂の不滅を解するにあらざれば基督敎を解する能はずと。

然しながら奇異なる事には聖書には靈魂不滅なる熟語はないのである、靈魂なる語はある、又不滅なる語はないではない、然しながら靈魂不滅と云ふが如き、靈魂は其物自體にて不滅であると云ふことを通ずる語はない、羅馬書二章七節に

耐え忍びて善を行ひ榮光と貴尊と不朽とを求むる者には永生を以て報い給はん

とあり、又哥林多前書十五章五十三節に

此朽る者は必ず朽ざる者を衣、死ぬる者は必ず死なざる者を衣るべし

とあり、又提摩太後書一章十節に

キリスト死を滅し、福音を以て生命と朽ざる事とを明らかにせり

とある、以上は新約聖書に於て不朽なる語が用ゐられてある著明の場合である、然し以上の場合に於て不朽は靈魂不滅を意ふのではない、善を行ひ福音を信ずる者に賦與せらるべき不朽(復活體の)を云ふのである、卽ち不朽は靈魂の特有性として錄されてあるのではない、神の恩賜として示されてあるのである。

然らば靈魂不滅の思想は何處から來たのである乎と云ふに、之は聖書より出たのではない、希臘哲學より來たのである、ピサゴラス、プラトーなど云ふギリシヤの哲學者より出たのである、而して此思想が中古時代の神學者に由て基督敎に輸入され、其れよりして靈魂不滅說が基督敎の根本的敎義である乎のやうに思はるゝに至つたのである、勿論基督敎に之に似たる敎示のないではない、乍然基督敎は明白に靈魂

不滅と云ひて靈魂性來の不滅を傳へない、靈魂は不滅である乎も知れない、或は不滅でない乎も知れない、是れ基督教の特に傳へんと欲する所ではない、基督教は人を不滅たらしむるの道を傳へる、即ち實際的の不滅を傳へる、形而上學的の不滅を傳へない、靈魂不滅は埃及人の思想、印度人の思想、希臘人の思想であると云ふことは出來る、然れども猶太人の思想であると云ふことは出來ない、而して猶太人の思想を繼承たる基督教は靈魂不滅を以て其根本的教義と爲さない、循つて基督教を說くに方て先づ靈魂の不滅を證明するの必要はないのである。

然らば基督教は靈魂不滅に代りて何を教ゆる乎と云ふに、其れよりも更らに確實なる更らに肝要なることを教ゆるのである、基督教は預言者エゼキエルを以て曰ふ

罪を犯せる靈魂は死ぬべし

と（以西結書第十八章四節）、又使徒パウロを以て曰ふ

罪の價は死なり

と（羅馬書六章廿三節）、靈魂は元來不死の者である乎否や、是れ基督教の論ずる所

ではない、基督教はたゞ罪を犯せる靈魂の死たる者である事を傳へる、彼れ若し元來不死の者なりしとするも彼は今は罪を犯せるに由て死たる者である、彼れ若し生れながらにして不朽の性を具へざる者であるとするも、彼は罪を避くるに由て不死の者たるの特權を有するを得べし、問題は滅、不滅の問題ではない、滅びんと欲する乎滅びざらんと欲する乎の問題である、本然性の問題ではない、可能性の問題である、基督教が哲學と異なる點は茲に在る、哲學が人を究めんとするに對して基督教は彼を救はんとする、哲學者に取りては研究の材料たる人類は基督教に取りては「矜恤の器」であるのである（羅馬書九章廿三節）。

基督教は更らに傳へて云ふ、不朽は惟りイエスキリストに於てあると、

彼は獨り不死を有す

と（提摩太前書六章十六節、ラゲ氏譯）、又

神の子を有つ者は生命を有ち、子を有たざる者は生命を有たず

と（約翰第一書五章十二節）、又

イエス曰ひけるは我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬるとも生くべし

と（約翰傳十一章廿五節）、不死と生命とは人に於てあるのではない、キリストに於てあるのである、人は彼より之を受けずして他に不滅となるの途はないのである、不滅は神がキリストを以て世に賜ひたる大なる恩賜である、不滅は人に生れながらにして有る者ではない、或は一時はありしならんも彼は今は之を失ふたのである、確實なる不滅は今やイエスキリストに於てのみあるのである、故に言ふ

キリスト死を滅し福音を以て生命と不朽とを著明にせり

と（提摩太後書一章十節）、又

彼を除いて別に救あることなし

と（行傳四章十二節）。

而して基督教は如斯くに說て獨斷說を唱ふるのではない、實にキリストを除いて他に不朽の生命はないのである、不朽は元是れ論理的に立證し得べき者ではない、實驗的に確認し得べき者である、恰かも健康の何たる乎は學理的に立證し得らるゝ者

にあらずして、實驗的に感得し得らるゝ者であると同然である、我等は永生の何たる乎を知る、即ち聖書の示すが如し、

我等兄弟を愛するに因りて既に死を出て生に入りしことを自から知る、兄弟を愛せざる者は（今尙ほ）死の中に居る

と（約翰第一書三章十四節）、聖書の此言に由りて死の何たる乎、生の何たる乎、滅亡の何たる乎、不滅の何たる乎は最も明白に解るのである、死と云ひ不死と云ふは哲學上の事ではない、實驗上の事である、我等は人を愛し得るに至て不滅を自から知るのである、哲學者に證明せらるゝにあらずして獨り自から覺るのである。永生何者ぞ？　愛である、キリストの愛である、此愛を獲て我等は自から死を出て生に入りしことを知るのである、生命は眞理の如く自證者である、人は之を受けて「我れ死すとも生く」と曰ひて自證するのである、不死と云ひ、永生と云ひ、之を遠く蓬萊に探るの必要はない、不滅は今此處に之を獲得するとが出來る、キリストの愛を以て神と人とを愛するを得て我等は今日彼と偕に樂園に在ることが出來るので

ある。路加傳廿三章四十三節。

茲に於てか不滅の冥想すべき者にあらずして努力して獲得すべき者であることが判明るのである、

窄き門に入るために力を盡すべし

と（路加傳十三章廿四節）、又

その生命を惜む者は之を失ひ、其生命を惜まざる者は之を保ちて永生に至るべし

と（約翰傳十二章廿五節）、永生は神の恩賜であると同時に又多くの血と涙とを流して我有となすべき者である、

永生とは唯是れなり、即ち眞の神なる爾と其遣はしゝイエスキリストを識る事なり（約翰傳十七章三節）、

神とキリストとを其すべての方面に於て識ること、是れが永生である、如何にして能く之を識るを得ん乎、是れ聖書の提出する問題であつて又其能く解決する問題である、先づ霊魂不滅を說いて然る後に人をキリストに導くことは出來ない、彼にキリストを示すは彼をして不朽の生命を感得せしむる唯一の途である。

人命は何故に貴重なる乎

是れ自明理のやうであつて、實は隨分困難しい問題である、人命は何故に貴重である乎、何故に赤子の生命は數十萬圓を値ひするアラビヤ馬のそれよりも貴重である乎、何故に法律の前には乞丐の生命も貴族のそれ丈け貴重である乎、何故に死ぬる病人とは知りつゝも全治し得べき者と見做して之を看護すべきである乎、何故に我子なればとて若し之を殺せば他人を殺したと同じ罪に問はれる乎、何故に我生命を奪ふことなればとて自殺は極惡の罪惡である乎、是れ明白の眞理であるが、然かし何人も能く解し得る眞理ではない。

此問題に對して普通提供せらるゝ解答は是れである、即ち人類の自衛上人命を尊重するの必要があるからであると、即ち他人の生命を輕ぜんには自己の生命を輕ぜらるゝの危虞あるが故に、自己の生命を重んずる上から他人の生命を重ずるのであると、然れども是れ甚だ不充分なる解答であることは之を生涯の實際に照らして見て能く判明る、人の生涯には他人の生命を害ふ方が却て自己の生命に利益なる場合が澤山ある、若し自衛上より云ふならば自己に敵する者の生命は出來得る限り之を芥除するに若くはない、爾うして多くの場合に於て此理からして、即ち自衛の必要からして、戰爭は起され、故殺、謀殺は行はるゝのである、「自衛の必要」は人命貴重の理由としては甚だ薄弱である。

或ひは言ふ、是れ其同類的本能に存する觀念に因ると、牛は牛の生命を貴び、猿は猿の生命を重んず、其如く人は人の生命を貴ばざるを得ずと、然しながら人が人の生命を貴ぶのは其本能性以上てある、人は人命を貴重するに止まらず、之を神聖視する、殺人罪に對して嫌惡を感ずるに止まらず義憤を感ずる、我身を害はれしやうに

感ずるのみならず、宇宙の法則が破られしやうに感ずる、人は人に對して同情を懷くのみならず、義務を自覺する、カインが其弟アベルの身に關して神に答へしやうに**我れ豈、我弟の守者ならんや**（創世記四章九節）とは我等が言はんと欲するも能はざる所である、同胞は同胞であるばかりではない、何にか或る他の者の代表者である、人が其生みし子を見るに方ても、己が子としてのみ之を見ない、大なる委託物として見る、故に之を愛するに情を以てのみしない、義務を感ずる、我子は實は我子ではない、我と同じ丈け貴い者であつて、時には自己を棄てゝも保護しなければならない者である。

何故に人命は貴重なる乎、人は其貴重なるを知る、然れども神の啓示に由てのみ能く其貴重なる所以を知る、人命の貴重なるは是は神の生命であるからである、即ち人は神に象りて造られたる者であるからである（創世記一章廿六節）、勿論禽獸の生命とて貴くないではない、生命はすべて貴くある、然しながら人の生命は特別の意味に於て貴くある、即ち、神の性を備えて居るが故に貴くある。

神に象りて造られたる者であるから勿論神ではない、然れども神の如く成り得る者である、即ち神の子たるの可能性を備えたる者である、獸の如く亡び失することなくして、神が生き給ふが如くに生き得る者である、馬は加何に價貴き者と雖も此性を備えない、獸はすべて今日の物である、然れども人は今日を以て失すべき者ではない、此永遠の性を有する一點に於て一人の丐乞は千萬疋の名馬よりも貴いのである。

或人嘗て白痴教育者ジェームス・B・リッチャーズに語るに狆を教育するの白痴を教育するに優さるを以てせり、リッチャーズ憤怒を含んで其人に答へて曰く

卿は狆に教ゆるに多くの奇藝を以てするを得ん、然れども余は是等の白痴兒童に永遠の神を示すを得べし

と、實に其通りである、白痴の兒童と雖も神を示さるゝの一點に於ては總ての動物以上である、白痴教育の必要は之を經濟の上より打算することは出來ない、彼等を神の子と見ざる間は、彼等のために萬金を投じて彼等を教へんとするの動機は起らない。

勿論、神の何たる乎は自身神を知るまでは判明らない、隨て人命の貴重なる所以も自身神を知るに至るまでは充分に會得することは出來ない、神を知ってのみ始めて生命の貴重なる譯が判明る、眞といひ、善といひ、美といひ、是れ實體的に神に在て存する者である、神を識つて最も賤しき人も非常に貴くなる、帝王よりも、學者よりも、富者よりも貴くなる、爾うして斯かる最上の貴尊に達するの資格を備えて居るが故にすべての人の生命は非常に貴重なるのである。

人命の貴重なるはキリストの降世と其贖罪の死とに由て最も明白に人類に示された。人の生命は宇宙の主宰なる神が其の獨子を送ってまでも之を救はんと欲し給ふほどの價値のある者である、人の貴重なるを知って神子受肉の奥義の一斑を解するを得べく、又神子受肉を知て人命貴重の理を深く辨へることが出來る、一は他を解釋する

神は其の生み給へる獨子を賜ふほどに世の人を愛し給へり、此はすべて彼を信ずる者に亡ることなくして永生を受けしめんため也と（約翰傳三章十六節）、人命の貴重

なる所以を述べし言葉にして是れよりも深く、又是れよりも高いものはない。キリストの代りて死に給ひし弱き兄弟（哥林多前書八章十一節）、是れがすべての弱き人、すべての苦しめる者、すべての貧しき者を救はんとする最高最深の動機である、路頭に迷ふ無宿童兒、警官に逐立てらるゝ乞丐、經濟的には社會に何の價値もなき白痴、跛者、瞽者、瘖者、殘缺者、是れ皆な「キリストの代りて死に給ひし弱き者」である、故に貴くある、彼等とても若し聖旨に合はゞ信仰に由りて神を見ることが出來、天使の如き者と成ることが出來る、彼等を害ふのは金剛石を粉粹し、名馬を屠殺するにまさる數層倍の罪惡である、神の像を瀆す者は神を瀆したと同一の罪に問はる、人類は無意識的に人命を尊重して其造主を崇めつゝある、神の像、其代表者として見てのみ人の貴い理由が解かる、故に聖書は言ふて居る

汝の民の間に往きめぐりて人を譏るべからず、汝の隣人の血を流すべからず、我はエホバなり

と（利未記十九章十六節）、**我はエホバなり**と、我はエホバなり、而して人を譏り人

を殺す者は我を殺す者なりと、宗教に由らざる道德の甚だ淺いものであることは此一言に由て見ても判明る、神の代表者として人を見るにあらざれば、其の生命の如何に貴い乎、如何に重い乎は判明らない、人は神の宮殿として貴いのである。

基督者は何故に善を爲す可き乎

基督者は善を爲すべきである、然かし彼は何故に善を爲すべきである乎、是れ至て容易いやうで實は甚だ困難い問題である。

基督者は現世に於ける報酬を目的として善を爲してはならない、

汝饗筵を設くる時は貧者、不具者、跛者、瞽者等を請くべし、然らば汝福ひなるべし、そは彼等は汝に報ること能はざれば也、義人の甦らん其時汝等に報賞ある

べし

と（路加傳十四章十三、十四節）、我等は我等の善行に對して最終の日に於て神より受くる義の報賞のほか、人より何の望む所があつてはならない。

基督者は又名譽を目的として善を爲してはならない、

汝等人に見せんために其義を人の前に行す事を慎むべし、……施濟を行す時人の榮を得んために會堂や街衢にて僞善者の如く筩を己が前に吹かしむる勿れ、……汝施濟を行す時は右の手の爲す事を左の手に知らする勿れ

と（馬太傳六章一、二、三節）、世の人望を博せんために、國人に愛國者として認められんために我等は善を爲してはならない、我等は譏らるゝも、譽めらるゝも、世の批評なるものは無きものと見て、爲し得る丈けの善を爲すべきである。

基督者は又善の成功を期して之を爲してはならない、此世は惡の世である、善は弱くして惡の强い世である、暗黑は光明を壓し、罪惡は正義を掩ふ世である、斯かる世に在て我等は善の成功を期して絶望せざるを得ない、キリストは世の始より殺され給ひし羔であつて今尙ほ殺されつゝあり給ふ者である（默示錄十三章八節）、キリストの如くに正を行ひ義を唱へた者で或る意味に於て世に殺されなかつた者は未だ曾て一人も無い、**凡の人汝等を譽めなば汝等禍ひなる哉**である（路加傳六章廿六節）、姦惡の此世に善と認めらるゝ事は善ではない、惡である、善を此世に於て爲さんと欲する者は失敗を期して之を爲さなければならない、十字架を負はずしてキリストに從ふことは出來ない。

然らば我等は何を目的に善を爲すべきである乎、何を目的に福音を宣傳へ、何を目的に眞理の探究に從事するのである乎、若し善行に報酬なく、名譽伴はず、成功の見込なしとならば善を行すの動機は那邊に在る乎、我等は善を爲して實は空を擊つのではあるまい乎、善行はすべてドンキホテの事業ではあるまい乎。

否な、爾うではない、爾う想ふのは此世を實の世と見做すからである、然かし我等は此世を實の世としては見ない、是れは假りの世である、準備のための世である、

完成されたる世ではない、完成に向ひつゝある世である、**そは見ゆる所の者は暫時にして見えざる所の者は永遠なれば也**である（哥林多後書四章末節）、見ゆる所の此世は暫時的の者である、爾うして基督者が善を爲すはこの暫時的の世を益せんがために爲すのではない、彼の目的が永遠にあるが故に、彼は暫時的の此世より報賞をも名譽をも望まないのである。

汝等主に在りて其爲す所の勞の空しからざるを知れば也とある（哥林多前書十五章末節）、我等基督者が善を爲すの動機は茲に在る、我等が善を爲すのは己れのために爲すのではない、又世のために爲すのでもない、主に在りて爲すのである、キリストの事業として爲すのである、神キリストに在りて世々の前より定め給ひし企圖を成就せんがために爲すのである（以弗所書三章十一節）。

我等は何故に福音を宣傳ふるのである乎、勿論教勢擴張のためではない、我等の弟子を作らんためではない、然ればとて所謂信者を作らんためでもない、傳道師の傳道に由てすべての人が救はるべしとは聖書の何處にも書いて無い、傳道は宣明てある、キリストの福音のデクラレーションである、之に由て多くの人は頼ぶべし又多くの人は興るべし（路加傳二章三十四節）、頼ぶるは勿論我等の歎く所であつて、興るは勿論我等の歡ぶ所であるが、然かし頼ぶと興るとは是れ全く神の聖旨に存する所であつて、我等の關する所ではない、**天國の此福音は萬國の民に證しせん爲めに普く全世界に宣傳へらるべし**とある（馬太傳廿四章十四節）、神が之を以て萬國の民を鞠き給はんがために、我等は福音を普く全世界に宣傳ふるのである。

傳道の目的が茲に在らずして我等は此業に就て全然失望せざるを得ない、傳道は其勤勞の割合に信者を作らないことは最も明白なる事實である、米國の如き福音の最も廣く行渉りたる國に於てすら教會に屬する信者は僅かに其人口の五分の一である、爾うして又是等教會信者の中に眞實に神を信ずる者は何人ある乎、實に寥々たる者である、所謂る基督教國なる者はすべて事實上の非基督教國である、最も激烈なる無神論は所謂る基督教國に於て行はれる、罪惡は基督教の宣傳と同時に減退せずして、却て增加しつゝある、世が基督教の傳道を以て救はれないのは何よりも明白な

る事實である、傳道は其成功を現世以外に於て期するに非れば大失望の種である、現世の改善を目的として基督教の傳道に從事した者が幾人となく傳道を放棄するに至つたのは決して怪むに足りない。

傳道の目的が現世の改善にないやうに其他の改善事業もすべて此世の改善のためではない、禁酒運動は如何に熱心なるも國民の使用する酒精の量を減ずることは出來ない、否な、之に反して基督教の最も盛なる國が最も多量に酒を飲む國である、世界の飲酒國とは日本ではない、米國である、支那、印度ではない、英國である、禁酒家は回々教徒の中に多くして基督教徒の中に少ない、禁酒運動は決して酒を禁じない、此世に於て酒を禁ぜんとして禁酒運動は無益の運動である。

非戰運動とても同じである、非戰論が唱へられしために戰爭は少しも減じない、否な、所謂る文明の進歩と共に戰爭の規模は益々擴大しつゝある、基督降世後千九百年の今日ほど軍備の整ふたる時はない、最も慘酷なる戰爭はアレキサンドル、シーザーの戰爭ではなくして日露戰爭であつた、文明諸國が最も熱注しつゝある問題は

宗教問題でもなければ、教育問題でもなければ、將た又殖產問題でもない、戰爭問題である、如何にして最も容易く同胞を屠らん乎、是れ英國人も米國人も日本人も、露西亞人も獨逸人も佛蘭西人も伊太利人も日夜焦慮しつゝある問題である、外國傳道のために三百萬弗を費すを惜む米國民は一千萬弗を値する戰鬪艦幾艘を造るも少しも其費用を惜まない、世に非戰論は唱へられないではない、而かも其聲たるや雷霆の轟に比ぶる鶯の聲に過ぎない、美は美なれども何の力をも有たない聲である、此世より戰爭を廢せんとするは鴨綠江を逆流せしめんとするよりも難くある、我等の筆は如何に椽大なるも陸海軍將校の劒に抗する事は出來ない、彼等は我等が非戰を唱ふるを見て笑ふ。

然しながら我等は非戰論の唱道を廢めないのである、其、到底此世に於て行はれない事を知りつゝ廢めないのである、我等は幾多の理由よりして之を止めないのである、我等の良心が之を證し、神の言葉なる聖書が之を敎へ、ナポレオン以上ビスマルク以上の偉人が之を唱へしに由て之を止めないのである、爾うして彼等が之を唱へし

は現世に於て此理想が行はれやうと思ふたからではない、彼等が其心の奥深き所に於て神の聲を聞いたからである、實に非戰を信ずるの信仰は此世の信仰ではない、キリストの再現を信ずるにあらざれば眞面目に信ずることの出來ない信仰である。

戰爭は何時廢まるであらふ乎、非戰論が輿論となつて、人が自から進んで兵を廢める時であらふ乎、否な、否な、斯かる時は俟てども決して來らない、今日まで人類が世界の平和は既に到來せりと信じた時は幾度もあつた、アウグスタス・カイザルの下に羅馬帝國が一統せられし時、近くは露西亞皇帝アレキサンドル第一世に由て所謂「基督教國の神聖同盟」が唱へられし時に戰爭は此世に於て終結を告げたと信ぜられた、然かし斯かる信仰は皆な迷信であつた、今より後、平和會議は幾回其會合を重ぬるとも、狼は小羊と偕に宿り、豹は小山羊と偕に伏し、牝牛と熊とは食物を共にする時は來らざるべし（以賽亞書十一章）、露國は何時までも熊なるべし、英國は何時迄も獅子なるべし、米國は何時までも鷲なるべし、預言者エレミヤの言ひし如く**豹其斑駁を變へ得る乎、若し之を爲し得ば惡に慣れたる汝等も善を爲し得べし**

（耶利米亞記十三章廿三節）、英人と露人と獨人と佛人と日人と米人とが其戰爭の性癖を去らんことは豹が其斑駁を去るよりも難くある。

然らば戰爭は永久に廢まるまい乎、然り、廢む時がある、それは**エツサイの根より一つの枝生え、其口の杖をもて國を擊ち、その唇の氣息をもて惡人を殺し給ふ**其時（以賽亞書十一章一、四節）、**民は其劒を打かへて鋤となし、其鎗を打かへて鎌となし、國は國にむかひて劒をあげず、戰鬪の事を再び學ばざるべし**（同二章四節）、永久の平和は主の再現を俟つて此世に臨る、**人の子己れの榮光をもて諸の聖使を率來る時は其榮光の位に座し、萬國の民を其前に集め、牧羊者が綿羊と山羊とを別つが如く彼等を別ち給ふべし**（馬太傳廿五章卅一、二節）、新らしき天と新らしき地は斯かる裁判ありて後に此世に臨むのである、聖き城なる新らしきエルサレムが新婦がその新郎を迎へんために飾りたるが如く備へ整ひて神の所を出て天より降る時に人類の涕は悉く拭ひ取られ、復た死あらず、哀み哭き痛み有ることなきに至るのである（默示錄二十一章）、平和は他の恩惠と等しく地より湧き出づる者にあらずして天より降

り來るべき者である、春が來るにあらざれば人工を以てしては小山に花の咲かざるやうに、キリストが現はれ給ふにあらざれば人の力を以てしては世に平和は臨まないのである。

然らば我等は主の再現の時まで手を束ねて沈默を守るべきであらふ乎、否な、我等は今より其準備をなすべきである、新郎を迎ふるための修飾をなすべきである、我等は潔き勇ましき行爲を以て主の再來を速むべきである（彼得後書三章十一節）、我等は農夫が根に糞し、枝を刈込みて春の到來を待つが如くに、眞理を唱へ、不義を排して主の再來を待つべきである、**我等は神と共に働く者である**、爾うして彼が平和を以て上より臨み給ふに對して我等は平和の準備をなして下より彼を迎へ奉るのである、我等は主が來りて自から爲し給ふことを豫め爲し置きて聊か其勞を省き奉らんと欲するのみならず、又自から少しく其聖業に參與して多少の榮譽に與からんと欲するのである、我等は純潔、非戰を唱へて不可能事を唱ふるのではない、我等は主が來て實行し給ふ事を今唱へつゝあるのである、我等はキリストを離れて善の

成功を望まないが、然れども主に在りて行す所の勞らきの成功を確信して善行を努むるのである。

故に我等は我等の善行に此世の報酬が伴はないとて失望しない、**義しき人々の甦らん其時汝等に報答あるべし**と主は曰ひ給ひたれば也、我等は人に譽められないとて落膽しない、

今より後、義の冕、我がために備へあり、即ち正しき審判を爲す者、其日に至りて之を我に賜ふ、惟我に賜ふのみならず、すべて彼の現はるゝを慕ふ者に賜ふべし（提摩太後書四章八節）

とあれば也、我等は又我等の爲す善行が此世に於てすべて失敗に終るを悲まない、**そは我等主に在りて其行す所の勞の空しからざるを知れば也、又、そは我等必ず皆キリストの臺前に出て善にもあれ、惡にもあれ、各々身に居りて爲しゝ所のことに循ひ其報ひを受くべき者なれば也**（哥林多後書五章十節）。

最も善き聖書の註解

申命記にヅライバー氏あり、士師記にG・F・ムーア氏あり、預言書にデリッチ、チーニー、デビッドソン氏等あり、新約全體にベンゲルあり、マイヤーあり、其馬太傳に近頃發刊になりしアレン氏あり、其路加傳にプラマー氏あり、其羅馬書にサンデー氏あり、其加拉太書にライトフート氏あり、其希伯來書と約翰書翰にウエストコット氏あり、其默示錄にミリガン氏とスウキート氏あり、然れども是等のすべての註解書に優りて最も善き聖書の註解は身の患難と心の苦痛となり、註解書は之を省くを得べし、然れど苦痛と患難と無くして聖書を解する能はず、新舊六十六卷の書は總て是れ悉く患難の中に書かれし書なり、故に患難を知らずして聖書を解する能はず、又患難に居らずして之を樂しむ能はざる也。一九〇七、六、八八號

研究十年終

『研究十年』奥附

實價 上製壹圓 並製六拾錢

大正二年十二月二十一日印刷
大正二年十二月二十三日發行

不許複製

著者　東京府豐多摩郡淀橋町大字柏木九百拾九番地　內村鑑三

發行兼印刷人　東京府豐多摩郡淀橋町大字柏木百拾參番地　山岸壬五

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場

發行所　東京府豐多摩郡淀橋町大字柏木九百拾九番地　聖書研究社

終